

福井県埋蔵文化財調査報告 第184集

史跡白山平泉寺旧境内

—一般県道平泉寺大渡線道路改良事業に伴う調査—

2023

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第184集

史跡白山平泉寺旧境内

—一般県道平泉寺大渡線道路改良事業に伴う調査—

2023

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、一般県道平泉寺大渡線道路改良事業に伴って、勝山市平泉寺町において令和元年度に実施しました史跡白山平泉寺旧境内の発掘調査の成果をとりまとめました。

史跡白山平泉寺旧境内は、白山信仰の拠点であり、養老元年（717）に創建され、天正2年（1574）に一向一揆との抗争に敗れて全山焼亡するまでの約850年にわたって存続したと伝わっています。

平成元年度より勝山市教育委員会が行ってきた発掘調査の結果、かつての境内全域において、石敷道や石垣によって整然と区画された多数の坊院跡が発見され、中世宗教都市を象徴する白山平泉寺の姿が少しずつ明らかになって参りました。

平成9年3月には旧境内の全域が史跡に追加指定され、平成20年度から25年度にかけて本格的な整備となる史跡等総合整備活用推進事業が実施されてきました。

今回、当センターによって実施した立会調査および本調査によって、南北を石垣や土塀によって区画された坊院跡の存在が明らかになりました。土壙や掘立柱建物、井戸、土坑、多数の小穴などが確認され、遺物も中世の陶磁器類のほか、弥生時代以前の土器や石器も少量ながら見つかっています。

本書が今後、史跡白山平泉寺旧境内をはじめとする勝山の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方に活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの方々から多大な御支援と御協力を賜りましたことに、厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

福井県教育府埋蔵文化財調査センター

所長 中川佳三

例　　言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般県道平泉寺大渡線道路改良事業に伴い、令和元年度に実施した史跡白山平泉寺旧境内（福井県勝山市平泉寺町平泉寺所在）の発掘調査報告書である。
- 2 史跡白山平泉寺旧境内の調査は、福井県土木部奥越土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、松本泰典が担当した。
- 3 発掘調査は、令和元年8月26日から10月31日まで実施した。
- 4 出土遺物の整理作業は、令和3年4月1日から令和5年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで実施した。
- 5 本書の編集は佐々木芽衣が行い、松本泰典、川端良招、佐々木が分担して執筆した。ただし第1・3～5章については木村孝一郎が一部加筆した。第6章は分析を委託した株式会社吉田生物研究所の成果報告に、佐々木が一部加筆・修正して掲載した。執筆の分担は以下の通りである。
松本 第1章、第3・4章、第7章
川端 第2章
佐々木 第4・5章
(株)吉田生物研究所 第6章
- 6 本書に掲載した遺構図・地形測量および空中写真は、株式会社サンワコンに委託して作成したものを一部変更して使用した。遺構トレス・版組は松本、佐々木が行った。
- 7 木製品の保存処理および樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 8 本調査の史跡白山平泉寺旧境内に関するこれまでの成果発表のうち、本書と齟齬がある場合、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 9 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真是、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 遺構図に付した方位は、いずれも座標北を示す。
- 11 発掘調査並びに遺物整理に際しては、次の方々および機関の御協力を得た。(順不同・敬称略)
勝山市平泉寺町平泉寺地区　勝山市教育委員会　熊谷透（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館）
- 12 発掘調査には地元の方々の御参加・御協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員が当たった。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 遺物整理	2
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺跡の概要	7
第1節 地形と層序	7
第2節 遺構の分布	8
第3節 遺物の分布	8
第4章 遺構	11
第1節 土壘・石垣	11
第2節 掘立柱建物	11
第3節 井戸・土坑	13
第4節 集石・落ち込み	17
第5節 工事立会区の遺構	17
第5章 遺物	19
第1節 1・2区出土遺物	19
第2節 工事立会区出土遺物	26
第6章 自然科学分析	33
第7章まとめ	37

図版目次

図版第1 遺跡（1）1・2区全景	(3) 2区全景
(2) 1区全景	

図版第2 遺構 (1) SA 6	図版第4 遺構 (1) 立会調査区全景
(2) SA 6北側	(2) SV 1
(3) SX 5	(3) SP31断面
(4) SB 1	(4) SP9・10・26・27他
(5) 2区中央完掘状況	(5) SE 1・SK 1他
(6) 2区南側完掘状況	図版第5 遺物 (1) 1・2区出土遺物 1
(7) SP62礫出土状況	(2) 1・2区出土遺物 2
図版第3 遺構 (1) SE 1・SP15・16・17	図版第6 遺物 (1) 1・2区出土遺物 3
(2) SE 2土層断面	(2) 1・2区出土遺物 4
(3) SE 3完掘状況	図版第7 遺物 (1) 1・2区出土遺物 5
(4) SE 4土層断面	(2) 1・2区出土木製品・ 金属製品
(5) SE 5礫廃棄状況	図版第8 遺物 (1) 1・2区出土石器・石製品・ 弥生土器
(6) SE 8	(2) 立会調査出土遺物
(7) SE10土層断面	
(8) SA 2南側	

挿 図 目 次

第1図 調査位置図	1	第11図 工事立会区実測図	18
第2図 勝山市の位置と地形図	3	第12図 出土遺物実測図 (1)	20
第3図 周辺の遺跡分布図	4	第13図 出土遺物実測図 (2)	21
第4図 白山平泉寺旧境内図	6	第14図 出土遺物実測図 (3)	23
第5図 調査区平面図・ 調査区壁面断面図	9-10	第15図 出土遺物実測図 (4)	24
第6図 石垣・土坑・井戸実測図	12	第16図 出土遺物実測図 (5)	25
第7図 土壙・土坑・井戸実測図	13	第17図 出土遺物実測図 (6)	25
第8図 掘立柱建物・土坑・井戸実測図	14	第18図 弥生時代以前の出土遺物実測図	26
第9図 土坑・井戸・小穴実測図	15	第19図 立会調査出土遺物実測図	27
第10図 土坑・井戸・柱穴実測図	16	第20図 樹種同定顕微鏡写真 (1)	34
		第21図 樹種同定顕微鏡写真 (2)	35

表 目 次

第1表 主要遺構一覧表	11	第6表 木製品観察表	31
第2表 越前焼観察表	29	第7表 金属製品観察表	32
第3表 瓦質土器観察表	29	第8表 石器・石製品観察表	32
第4表 土師質皿観察表	29	第9表 弥生時代以前の遺物観察表	32
第5表 陶磁器観察表	30	第10表 出土木製品同定表	36

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

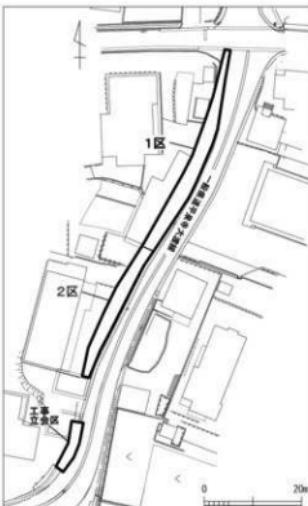
福井県勝山市平泉寺町平泉寺に所在する史跡白山平泉寺旧境内は、市内中心部から南東方向に約4kmの山中にある。

勝山市平泉寺町平泉寺を起点とする一般県道平泉寺大渡線は、交通量は多くはないものの、カーブが連續し道幅が狭いため、地元住民からは道路拡幅が求められてきた。一方で、道路拡幅に当たっては、特に平泉寺集落では道路沿いの住宅や倉庫、バス停留所、擁壁、排水路、消雪管の移設が必要であり、かつ史跡の範囲内であることから、当該区域については文化庁や勝山市教育委員会も含め、事業者や地元住民との慎重な協議・調整が必要となることが予想された。

そのため、福井県土木部奥越土木事務所からの事業計画を受けた福井県教育庁生涯学習・文化財課および埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）は文化庁や勝山市教育委員会と協議を進め、史跡内の遺構に影響がない範囲での工事計画を作るよう、奥越土木事務所へ要望した。それを受け、奥越土木事務所は、遺構の範囲や深度を確認するため、生涯学習・文化財課に試掘調査（調査対象約355m²）を依頼した。県埋文が平成30年8月7日に試掘調査を実施したところ、中世の遺構が広く展開していることが明らかになった。そのため、生涯学習・文化財課は工事前に総面積195m²の範囲で本格調査が必要であり、それ以外の場所については工事立会を行う旨を奥越土木事務所へ回答した。それを受け、奥越土木事務所は工事計画および調査計画を作成し、文化庁や勝山市教育委員会にも了解を得た。調査範囲は一般の住宅敷地にもかかるため、県と市は住宅倉庫新設時期を含めた協議を地元住民とを行い、平成31年度（令和元年度）に本調査および工事立会を実施することになった。なお、道路拡幅に伴って住宅・バス停を移設する敷地については、勝山市教育委員会が事前に発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は令和元年9月2日より開始し、同年10月31日に終了した。西に隣接する住宅新設や倉庫使用の関係で、調査区を便宜的に1区（北半）と2区（南半）に分割して掘削を進めた。調査区総面積は195m²を測り（幅約2~4m×長さ約75m）、調査区には一辺5mの方形グリッドを任意に設定し、東から西方向にA~C、北から南方向に1~17の記号を付してグリッド名とした。8月26日に1区の表土剥ぎを開始し、9月11日に作業員を入れて、周辺の草刈り・バリケード設置等の周辺整備を行った。9月13日から1区内での遺構検出・掘削作業を行い、9月27日に空中写真測量・俯瞰撮影を行った。9月30日・10月1日に遺構撮影と壁面断面図の作成などを行い、10月7日に1区の埋



第1図 調査位置図（縮尺1/1,000）

戻し作業を行った。10月2日からは2区の表土剥ぎを開始し、10月7日から遺物包含層や遺構検出・掘削作業を行った。また、10月26日には現地説明会を3回実施した（計18名の参加者）。10月28日に空中写真測量・俯瞰撮影を行い、10月29・30日に遺構撮影・壁面断面図の作成を行った。10月31日までにブレハブ・器材の撤収を終え、11月7日に2区の埋戻し作業を行った。なお、本調査に先立つ7月5～19日の期間で行われた工事立会では、遺構や遺物を多く検出したため、本報告で別途報告する。

以下、調査の過程を報告する。

調査日誌

調査地1区

8月26日	表土剥ぎ開始
8月27日	表土剥ぎ時、SA4検出
8月29日	SA4を除去。SA2検出
9月11日	作業員による作業開始 調査区の周辺の整備
9月13日	SA2の掘方確認
9月18日	SA2の図化と写真撮影
9月20日	SA2の石組解体。B1グリッド遺構検出
9月24日	B1、A・B2・3・A8～10グリッド遺構検出 半裁を行う。A5グリッド遺構検出
9月25日	B1、A・B2・3・A8～10グリッド遺構完掘
9月27日	全体清掃。俯瞰撮影と測量
9月30日	個別遺構・写真撮影
10月1日	壁面清掃および断面図作成
10月7日	埋め戻し

調査地2区

10月2日	表土剥ぎ開始
10月8日	表土剥ぎ終了
10月9日	A12～14グリッド遺構検出
10月10日	A10・11グリッドの包含層掘削
10月11日	A15・16グリッド遺構検出
10月15日	A12～16グリッド遺構半裁
10月18日	SX4検出。写真撮影
10月24日	A11～16グリッド遺構完掘
10月25日	現地説明会準備
10月26日	現地説明会実施
10月28日	全体清掃、俯瞰撮影と測量
10月29日	個別遺構・写真撮影
10月30日	壁面清掃および断面図作成
10月31日	現場終了

第3節 遺物整理

出土遺物はコンテナ9箱分である。内訳は中・近世陶磁器、木製品、石製品、金属製品、弥生時代以前の土器・石器である。

遺物整理は、令和3年4月～令和5年3月にわたり継続して実施した。

令和3年度は出土遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測作業を行い、木製品の保存処理も実施した。

令和4年度は原稿執筆、図版作成、写真撮影および編集作業を行った。

以上の作業と令和5年度3月の報告書刊行をもって、史跡白山平泉寺旧境内の発掘作業を完了した。

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（第2図）

勝山市は、福井県の北東部に位置し、市の周辺は北側と東側は石川県、南側は大野市・福井市、西側を永平寺町に接する。勝山市の中心部は、石川県との県境に位置する加越山地・大野市・福井市との間に位置する越前中央山地に囲まれ、盆地となっている。その盆地の周辺は、南部から北西部に向けて貫流する九頭竜川やその支流により河岸段丘や扇状地が形成され、入り組んだ地形を呈する。

加越山地は、九頭竜川以北の山地であり、西側から浄法寺山（標高1,053m）・大日山（標高1,368m）・甲山（標高1,391m）・取立山（標高1,307m）・烏岳（標高1,327m）・大長山（標高1,671m）・赤兎山（標高1,629m）など、西の台地から東に漸次高度を増し、標高1,000mを越える山々が連峰をなす。

一方、越前中央山地は、九頭竜川以南の山地であり、永平寺町との境に標高765mの経ヶ岳が位置するほかは、標高500m前後と加越山地と比較すると高度が低い。

白山平泉寺遺跡が所在する平泉寺町は、勝山市内中心部から南東方向へ約4km山中にに入ったところに位置する。平泉寺町は、東側にそびえる法恩寺山（標高1,356m）などが形成した火山岩の地質を基本とした地盤の緩斜面上に立地し、その標高は300m前後であり、勝山市域中心部と比較すると100m以上高い。史跡白山平泉寺旧境内の範囲は、東西2km、南北1kmの約200haで、その中心部に平泉寺白山神社が鎮座する。平泉寺白山神社の西側には、九頭竜川へと至る緩斜面が開けているが、北から東側には法恩寺山などが形成した山峰が連なり、南側は女神川によって浸食形成された高さ20~50mの急な崖面が続いており、自然地形を巧みに利用して築かれた天然の要害でもある。



第2図 勝山市の位置（縮尺1/2,000,000）と地形図（縮尺1/200,000）（勝山市教育委員会2018より引用）

第2節 歴史的環境

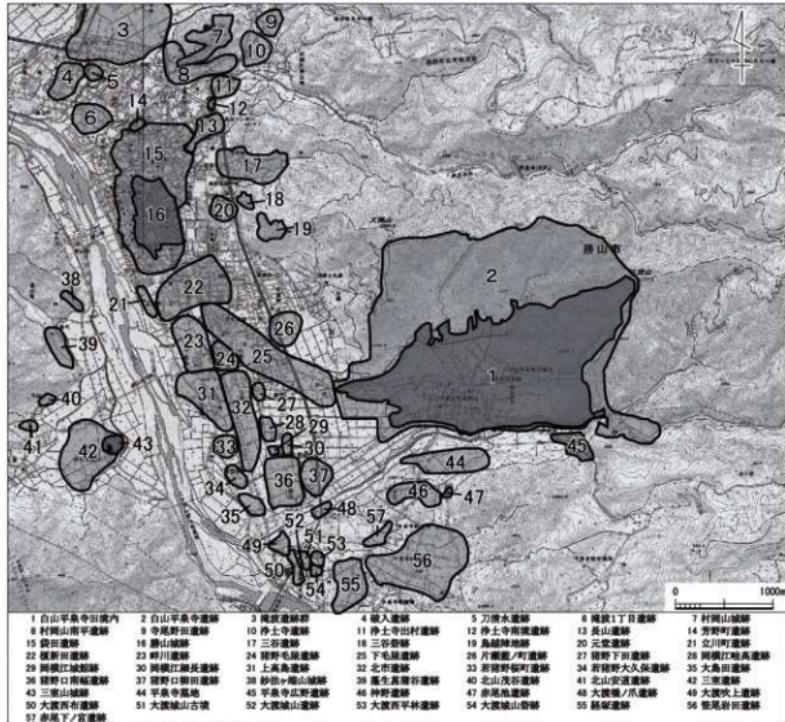
1 周辺の遺跡（第3図）

史跡白山平泉寺旧境内の周辺には、四至と伝えられる4地点（虚空藏・荒神岩・禪師王子・比島觀音）を結ぶ範囲内で多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺物では、河岸段丘上に位置する猪野口南幅遺跡（36）で、後期旧石器時代と考えられる石器が出土している。縄文時代になると遺跡数は増加し、配石遺構群を伴う集落遺跡として県指定史跡になっている三室遺跡（42）、中期に比定される土偶が出土した三谷遺跡（17）などがあげられる。

弥生・古墳時代の遺跡は、縄文時代と比べると減少する。三谷遺跡では市内で初めて銅鐸型土製品が出土し、方形を呈する大渡城山古墳（51）は3基の墳頂部で埋葬施設が検出され、副葬品として玉類や鉄製品が出土している。

奈良～平安時代にかけて、北市遺跡（32）で、多数の堅穴建物や掘立柱建物などが見つかっており、その所在地から「和名類聚抄」に記載された大野郡「毛屋郷」の中心地であった可能性が指摘されている。北市遺跡から北に22km離れた三谷遺跡では、10世紀に比定される須恵器に「毛屋 □」と書かれた墨書き土器が出土している。その他、下毛屋遺跡（25）や猪野毛屋遺跡（24）、猪野口南幅遺跡など集落遺跡が出現する。



第3図 周辺の遺跡分布図（縮尺1/50,000）

奈良・平安時代の集落の多くが中世まで継続し、三谷遺跡からは白山平泉寺の有力坊院の1つである「大型院」と墨書きされた木簡が出土している。この他、本遺跡の周辺には岡横江城館跡（29）、村岡山城跡（7）、大渡城山砦跡（54）など多数の城砦が確認され本遺跡との関連がうかがえる。

江戸時代の遺跡として、勝山城跡（16）があげられ、三の丸や馬出の堀跡が確認されている。

2 白山平泉寺旧境内の概要（第4図）

養老元年（717）、泰澄は林泉（平泉寺白山神社御手洗池）にて女神より信託を受け、白山に登り神仏を感じたと『泰澄和尚伝記』に伝わる。これが白山平泉寺の始まりである。平安時代の終わり頃、平泉寺は比叡山延暦寺の末寺となり発展していく。その繁栄ぶりは、四八社、三六堂、六〇〇〇坊、僧兵八〇〇〇人、寺領九万石、九万貫ともいわれる。天正二年（1574）、平泉寺の衆徒が一向一揆の立てこもる村岡山を攻撃するも、一向一揆勢により平泉寺は全焼焼失した（『朝倉始末記』）。こうして、中世白山平泉寺は終焉を迎える。

旧境内の規模は、東西約2km、南北約1kmの広大な範囲に広がっていることが確認されている。境内の東側と北側には、三頭山（777m）から派生する尾根が横たわり、尾根上には3か所の砦跡（第4図k、l、m）も確認されている。

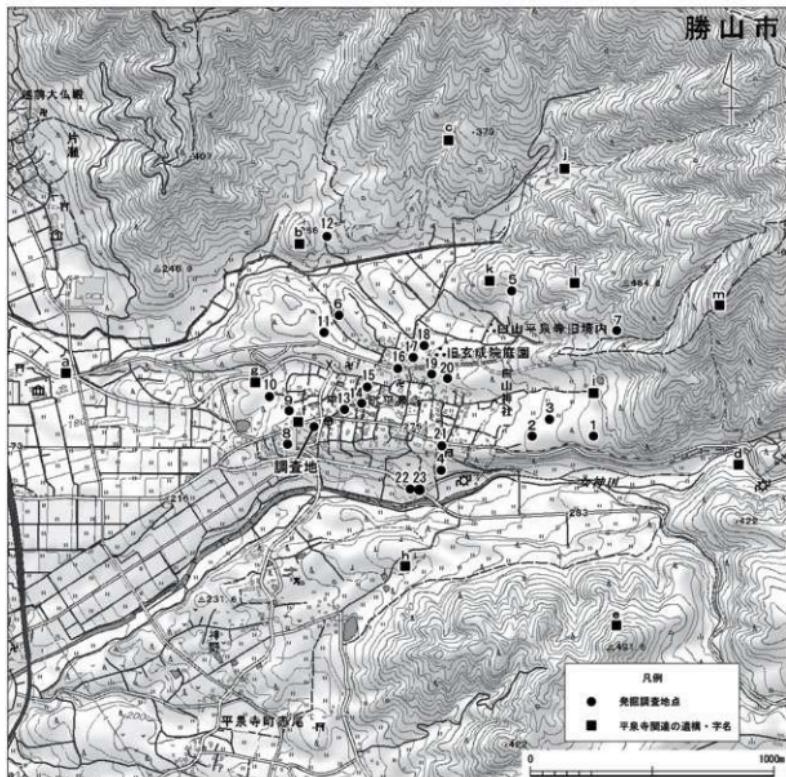
境内の南側は、女神川と急峻な崖である。境内の西側は、境内の正面であり九頭竜川に向かってひらけているが、溝口門付近（第4図f）で幅10mの大規模な箱築研堀、尾根上の菩提林付近では幅7mの薬研堀を確認している。また、境内から外へ出る幹線道路沿いに「市」の字名が残り、北谷の出口に「徳市」、南谷の西側出口には「安ヶ市」、南側出口には「鬼ヶ市」の字名がある。これらの場所には平泉寺全盛時代の「市」が立ったと伝わり、発掘調査でも室町時代の越前焼の甕などが出土するなど大規模な門前市の存在がうかがえる。

旧境内の内部構造は、古絵図などによると、中心部に主要な堂塔伽藍を配置し、北側に北谷2,400坊、南側に南谷3,600坊が連なっている。坊院の敷地は、小さな尾根や谷を造成して平坦面を作り出している。敷地面積は約1,000m²程度だが、西谷地蔵院や明王院、西蓮院などの有力坊院は3,000m²を測る。

こうした境内の内部構造は、これら坊院の出入口が、石疊道に面して複数の基準尺を用いて80尺（約25m）、100尺（約30m）、150尺（約45m）などで配置されていることから、複数回にわたる造成の積み重ねを経て形成されたとの推測が可能である。

参考文献

- 勝山市教育委員会 1990 『白山平泉寺』
- 勝山市教育委員会 1991 『白山平泉寺』
- 勝山市教育委員会 1993 『白山平泉寺』
- 勝山市教育委員会 1995 『白山平泉寺遺跡』
- 勝山市教育委員会 1996 『白山平泉寺遺跡』
- 勝山市教育委員会 1997 『史跡 白山平泉寺旧境内－保存管理計画書－』
- 勝山市教育委員会 2012 『白山平泉寺遺跡－急傾斜地崩壊対策工事等に伴う発掘調査－』
- 勝山市教育委員会 2018 『史跡 白山平泉寺旧境内』
- 勝山市 2017 『白山平泉寺 よみがえる宗教都市』 吉川弘文館



第4図 白山平泉寺旧境内図（縮尺1/20,000）（勝山市教育委員会1996掲載図を加筆・修正）

第3章 遺跡の概要

第1節 地形と層序（第5図）

調査区は、白山平泉寺旧境内が立地する段丘の南西に位置する。標高は調査対象地北端で約255m、南端で標高約251mを測り、調査区は北から南へ緩やかに下る地形上に設置した。調査区から南へ約30m先には女神川により形成された崖がある。

調査区内の基本層序は、①灰色土（コンクリート・造成土、近現代で厚さ0.1～2.0m）、②黒褐色粘質土（中世の遺物包含層で厚さ0.3m）、③黄褐色粘質土（基盤層）の順である。遺構は基本的に基盤層上で検出を行った。

なお、遺物包含層が良好に残るA10～13グリッドでは、遺物包含層上面で遺構検出を試みたが、一部の遺構を検出するにとどまった。基盤層上面で検出した遺構には遺物包含層と同じ時期の遺構が含まれることから、実際は多くの遺構が遺物包含層から掘り込まれていたと推定される。

遺物包含層は近現代の削平を受けていることを考慮するとしても、SA 6の根石と遺物包含層上面のレベルはおおよそ一致することや、遺物包含層上面で検出したSE 5に16世紀前半頃の遺物が含まれていることから、16世紀代の中世平泉寺最終面の遺構は、SA 6や遺物包含層上面で検出した遺構が該当するものと推定される。

また、遺物包含層下で検出したSX 4や基盤層面で検出した一部の遺構は、遺構内の出土遺物から、15世紀以前に形成された遺構とみられる。

B 1～A 5グリッドでは、標高約255mと調査区内で最も高所に平坦面が形成されるが、基盤層直上にコンクリート舗装面や盛土が造成されており、遺構は大きく削平されていた。

B 1グリッドで中世の井戸や柱穴を検出したものの、他のグリッドでは小さなピットが多かった。近世の遺構であるSK 8が付近に位置することを考慮に入れると、これらのピットは近世以降の屋敷に伴うものである可能性が考えられる。A 6グリッドでは高さ1.5mの崖を確認しており、崖面を利用して石垣が築かれていた。基盤層は崖の麓から南に向かって徐々に標高が下る。

A 7グリッドでは近現代に敷地の拡張を行っているため、造成土が20m以上堆積しており、遺構の残りは比較的良好で中世の井戸や柱穴を確認した。なお、造成土上面から掘り込まれた近代の便槽を数例確認している。

A 10～13グリッドにかけて遺物包含層が比較的良好に残存しており、特にA 10・11グリッドでは遺物包含層上面で土壘や井戸、柱穴を多く検出することができた。調査地は史跡指定地であり、工事による影響はこれらの遺構に及ばないため、A 10・11グリッドについては検出した遺構を記録したうえで、現状保存し、トレンチを除き遺物包含層以下での遺構検出は行わなかった。

A 14グリッドより南は遺構を確認できたものの、遺物包含層はみられず、近現代の削平により失われたと考えられる。

工事立会区では、基盤層の崖面を境にして大きく北側の上段と南側の下段に分かれ。上段では遺構を基盤層上面で確認した。

下段では複雑な堆積状況を示し、①造成土（近現代の道路造成）、②暗黄灰色土（表土層）、③焼土混じり暗褐色土（平泉寺滅亡時の大火層もしくは大火直後の整地層か）、④黄色ブロック・炭混じり暗褐

色土（中世整地層）、⑤黒褐色土（旧表土層・無遺物層）、⑥黄褐色粘質土（基盤層）の順に堆積していた（第11図調査区東壁土層略測図）。調査区中央から南側にかけては、基盤層が大きく落ち込み、黒褐色土がその落ち込みを埋めて、中世の生活面を形成していた。そのため下段の北半は基盤層上、下段の南半は黒褐色土上で遺構を検出した。また、黒褐色土上で検出された遺構やその周辺の落ち込みを埋めて整地した黄色ブロック・炭混じり暗褐色土上面は、SV 1 の生活面であり、本調査区では2面の中世遺構面があることが分かった。

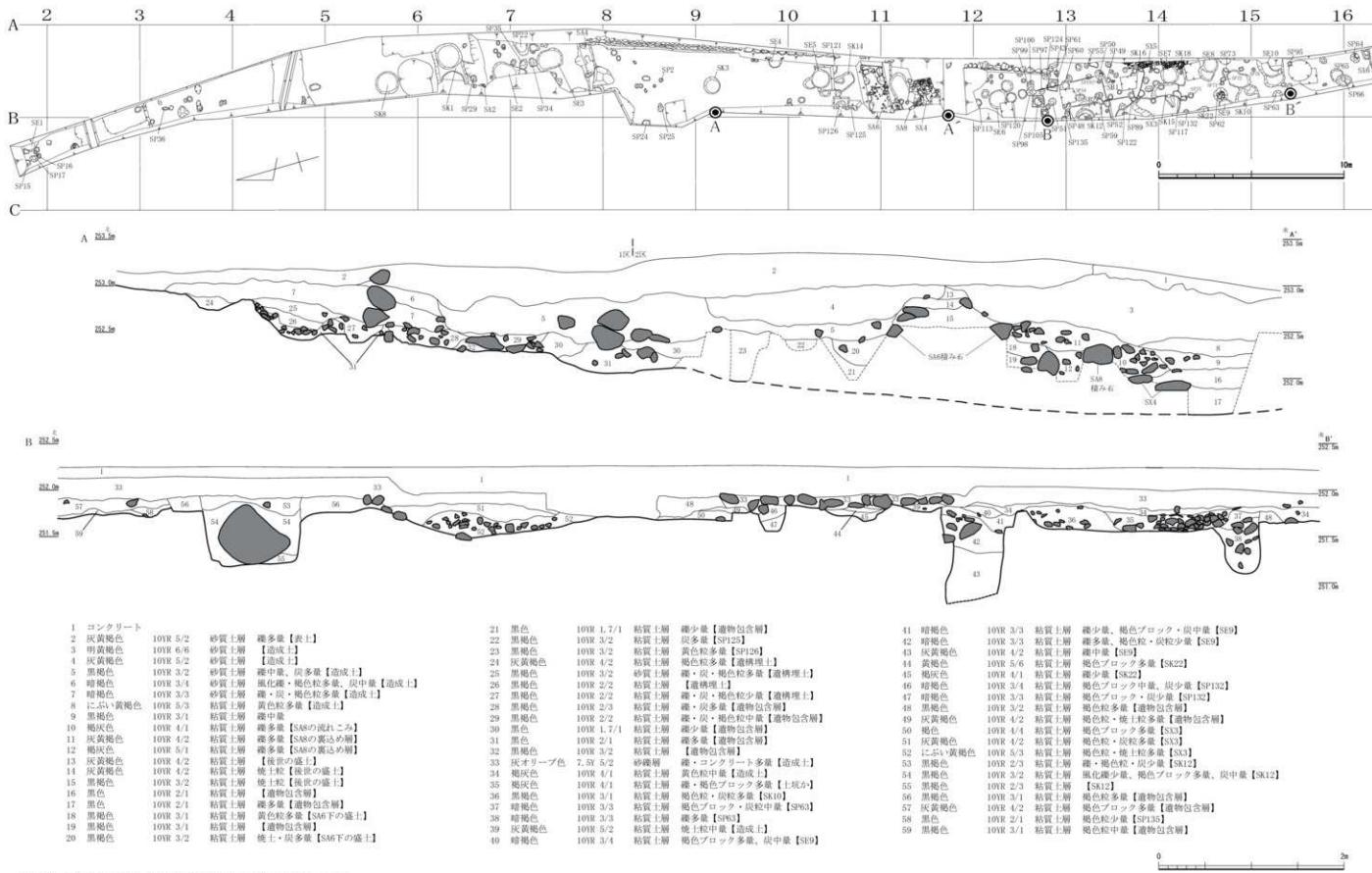
第2節 遺構の分布（第5図）

工事立会区を除く1・2区からは、中世の遺構として土壙1基、井戸10基、土坑8基、落ち込み状遺構2基、集石遺構2基、多数の柱穴を確認した。中世以外の遺構としては、近世～近現代の遺構（石垣3基・土坑2基・便槽・柱穴）を認める。B 2～A 5グリッドは後世の搅乱を受けており遺構密度は低く、中世の遺構はB 1・A 7・10グリッド以南に多い。A 10グリッド以南の遺構密度の高さは、包含層遺存の範囲とおむね一致する。A 10グリッドには坊院を南北に区画するSA 6があるが、遺構密度は南の坊院が高く土坑や小穴が多い。また10基の井戸はSA 6の北・南での分布差はないものの、A 7グリッド近辺に2基、A 10グリッド近辺に2基、A 14グリッドに3基と地点ごとまとまりがある。このうちSE 6～9はSB 1・2に伴う可能性があろう。近世の土坑はSA 2北側にみられる。

第3節 遺物の分布

遺物は中世の坊院や近世の屋敷に伴う陶磁器などや、弥生時代以前の土器・石器などが出土した。中世の遺物には、土器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品がある。土器・陶磁器には主に貯蔵具である越前焼壺、調理具の越前焼擂鉢、供膳具などの土師質皿、鉄釉・灰釉陶器、青磁・白磁・染付などの輸入陶磁器、瓦質土器の風炉や火鉢がある。木製品には箸のほか木杭があり、石製品には砥石・硯・臼、金属製品には釘がある。出土遺物に天目茶碗や四耳壺、瓦質風炉など喫茶の風習を示すものも存在するが、奢侈品は認めない。以下、各坊院を2分するSA 6を境にした様相を概観する。

遺物は包含層・遺構から多く出土している。分布はB 2～A 5グリッドは後世の搅乱を受けており出土量が少ない。包含層出土遺物は同層を認めるA 10～14グリッドに多く、特にA 10グリッドで目立つ。この範囲のみに遺物が集中する様相は、第1節で述べたとおりだが、SA 6以北のA 10グリッドは遺構密度が以南と比べて低いのが特徴である。遺構単位の分布では、SA 6以北はA 6～8・10グリッド、以南はA 12～14グリッドが出土遺物は目立つ。この範囲は遺構が比較的良好に残る地区に該当し、遺物は井戸・土坑からの出土が多い。遺物の種類、器種別の分布差は調査面積が狭く把握は出来ないが、近世の遺物は、同時期の遺構が分布するA 5・6グリッドにまとまる。また木製品でも箸はSE 3から多く出土し、SE 6・SK14・18でも認める。



第5図 調査区平面図・調査区壁面断面図（縮尺1/200・1/40）

第4章 遺構

1・2区からは、中世の遺構として土壘1基、井戸10基、土坑8基、落ち込み状遺構2基、集石遺構2基、多数の柱穴を確認した。中世以外の遺構としては、近世～近現代の遺構（石垣3基・土坑2基・便槽・柱穴）を確認しているが、本書では中世の遺構を中心に報告する（第1表）。

なお、ここで説明する遺構については、特に断りがない場合、上層では識別できなかったものを含め、基盤層上で検出した遺構である。

第1節 土壘・石垣（第6図・7図）

検出した土壘・石垣3基の内、土壘（SA 6）1基、および石垣（SA 2）1基をここで報告する。SA 2・SA 6とともに中世の土師質皿や越前焼、瀬戸・美濃焼などが出土しているほか、SA 6から弥生時代の土器（第18図112）、SA 2から磨製石斧（第18図111）が出土している。

SA2 A 6で検出した。段丘崖を利用して構築された石垣で、規模は、長さ2.3m以上、残存高1.0m、残存する石垣の勾配は75～80度である。積み石の石筋が斜め方向であること、また石垣裏込め層が近世・近現代の遺物を含むSK 1埋土を切り込んでいることから、近現代に構築された遺構である。

SA6 A 10・11で検出した。土塀基礎として構築された土壘で土壘北・南面で土留めの石積みを確認した。規模は、残存長2.6m、幅1.1m、残存高0.2～0.3mである。石積みに使用された石は自然石や割石で、積み石の平坦面や人為的に張った面を表に出している。土壘の盛土中には、角礫片や越前焼の破片が少量含まれていた。

調査区西壁では、この土壘の上にさらに盛土状の堆積を確認したが（第5図14・15層）、断面で石積みを確認できなかったため、SA 6を利用した後世の盛土である可能性がある。

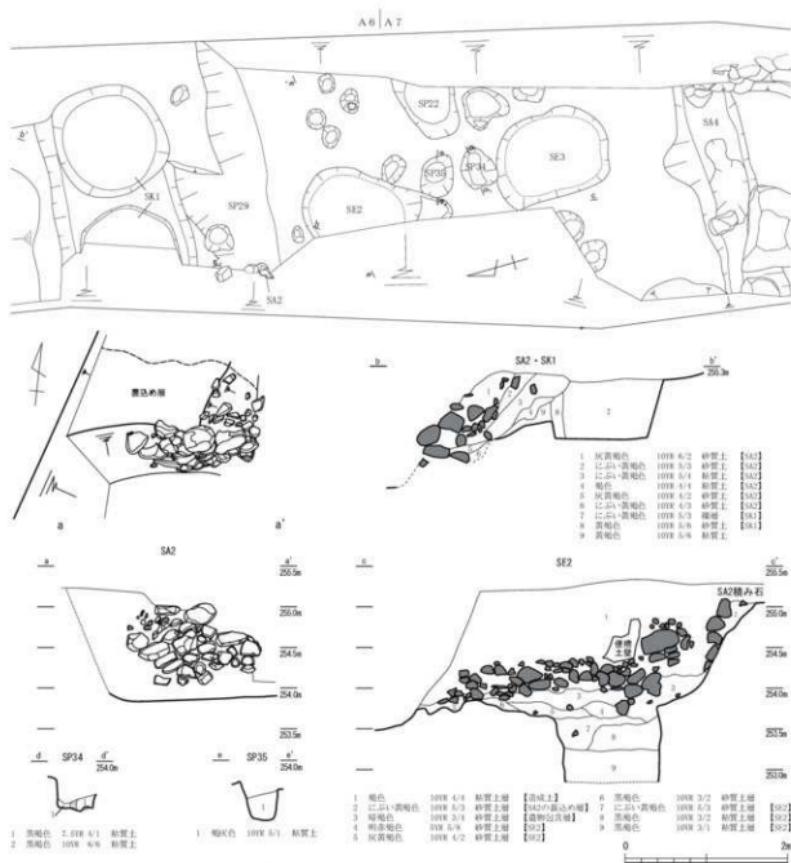
SA 6は16世紀以前の遺物包含層である黒褐色土層を基盤層としており、16世紀に構築されたと推定される。なお土壘南側は近現代の石垣（SA 8）が構築されている。

第2節 挖立柱建物（第8図）

中世の柱穴はB 1、A 6・7、A 10～16に集中している。平面径20～50cmの柱穴がほとんどで、深さは検出面から20cm以下の柱穴が比較的多いが、深さ50cm以上の柱穴もいくつか認められる。これらは主に掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が高い。埋土からの出土遺物は極めて限られているが、その中で

第1表 主要遺構一覧表（グリッド記載は1・2区のみ、拡大：拡大平面図、断：断面図、西：西壁、全体平面図は省略）

No.	グリッド	遺構名	旧遺構名	種類	伴因	写真図版
1	A6	SA2	—	石垣	拡平・断	図版第3
2	A10-11	SA6	—	土壘	拡平・断	図版第2
3	A12-13	SB1	—	掘立柱建物	拡平・断	図版第1
4	A12-13	SB2	—	掘立柱建物	拡平・断	
5	B1	SE1	SK5	井戸	拡平・断	図版第3
6	A6-7	SE2	SK6	井戸	拡平・断	図版第3
7	A7	SE3	SK7	井戸	拡平	図版第3
8	A9	SE4	SK4	井戸	拡平・断	図版第3
9	A10	SE5	SK23	井戸	拡平・断	図版第3
10	A12	SE6	SK19	井戸	拡平・断	
11	A14	SE7	SK17	井戸	拡平・断	
12	A14	SE8	SK13	井戸	拡平・断	図版第3
13	A14	SE9	SK20	井戸	拡平・断	
No.	グリッド	遺構名	旧遺構名	種類	伴因	写真図版
14	A15	SE10	SK9	井戸	拡平・断	図版第3
15	A9	SK3	—	土坑	拡平・断	
16	A-B13	SK12	—	土坑	拡平・西壁	
17	A10	SK14	—	土坑	拡平・断	
18	A13-14	SK3	—	落ち込み	拡平・西壁	
19	A11	SX4	—	集石	拡平・西壁	
20	A13-14	SX5	—	礫敷	拡平	図版第2
21	A16	SX6	—	落ち込み	拡平・断	
22	工事立会区	SV1	—	石列	拡平	図版第4
23	工事立会区	SB1	—	掘立柱建物	拡平・断	
24	工事立会区	SE1	—	井戸	拡平・断	
25	工事立会区	SK1	—	土坑	拡平・断	
26	工事立会区	SK2	—	土坑	拡平・断	



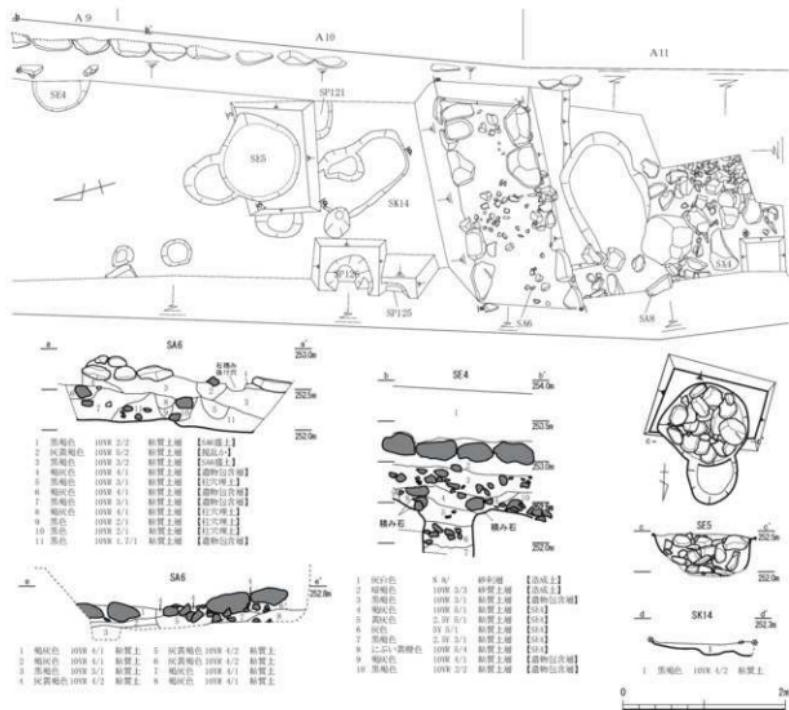
第6図 石垣・土坑・井戸実測図(縮尺1/60)

も15・16世紀の遺物を含む遺構が多く、13・14世紀の遺物の出土は非常に少ない。A12グリッド以南では、柱穴列がほぼ南北方向に並ぶ傾向にある（東へ5度前後傾く）。これらの柱穴列をもとに抽出した掘立柱建物を報告する（第1表）。

SB1 A12・13で検出した。SP50・52・60・98で構成され、柱間1.9m、柱径約0.5m、深度30~56cmであるが、SP50とSP52の柱間は1.5~1.6mとやや狭い。時期は15・16世紀代の可能性がある。

SB2 A12・13で検出した。SP48・59・89で構成され、柱間1.75m、柱径0.4~0.5m、深度10~32cmである。SP89から15世紀代の土師質皿（第13図40）が出土している。

このほかに、SP51・54やSP64・73・78・95なども、SB1・2よりは柱間間隔にばらつきがあるものの、方位がそれらとは揃うことから掘立柱建物を構成する可能性がある。



第7図 土壙・土坑・井戸実測図（縮尺1/60）

第3節 井戸・土坑（第6～10図）

検出した10基の井戸すべてと、土坑10基の内9基を報告する。

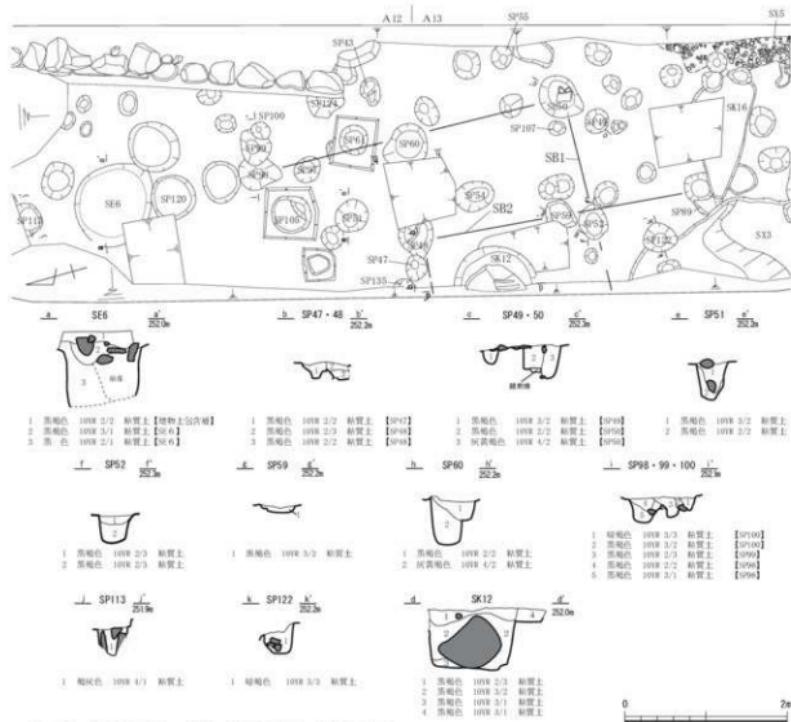
SE1（第10図） B 1で検出した。径0.9m以上、深さ0.8m以上を測る素掘り井戸である。井戸底まで掘削していない。暗褐色粘質土の1・2層下位に黒褐色粘質土が水平堆積する。

埋土から越前焼（第12図5）や土壁などが出土しており、遺物の時期から16世紀代の遺構である。

SE2（第6図） A 6・7で検出した。径1.3m、深さ0.9m以上を測る素掘り井戸である。井戸底まで掘削していない。水平堆積した9層と上位に堆積した黒色粘質土を、黄褐色砂質土の5層が覆う。埋土から13～16世紀の越前焼や青磁盤（第13図57）や瀬戸焼の鉄釉皿（第14図78）が出土しており、遺物の時期から15・16世紀代の遺構である。

SE3（第6図） A 7で検出した。径1.0～1.5m、深さ18mを測る素掘りの井戸である。埋土崩落のため、断面図測量を行えなかったが、本調査区では唯一井戸底まで掘り切った井戸である。廃棄したと考えられる礫が埋土上層に多量に含まれていた。

埋土から15・16世紀代の越前焼（第12図3）や青磁碗（第13図61）、木製の箸（第15図91・94～98）なども出土している。



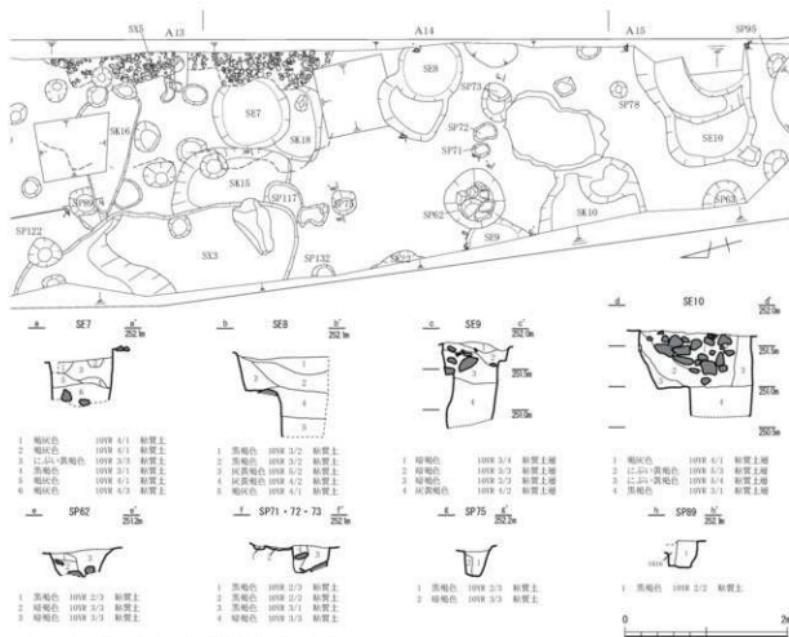
第8図 掘立柱建物・土坑・井戸実測図（縮尺1/60）

埋土上層では16世紀代の遺物を含むが、底面付近では15世紀の遺物のみであるため、同時期には機能していた可能性がある。

SE4（第7図） A 9で検出した。径0.7m、深さ0.6m以上を測る石積み井戸である。井戸底までは掘削していない。石積みは井戸上部のみであり、井戸下半分は素掘りのままである。石積みは自然石を使用するが、一部加工した礫も認める。東壁の観察から本遺構は遺物包含層から掘り込まれていることが判明した。埋土はレンズ状堆積の4層下に、黄灰色・灰色・黒褐色粘質土が水平堆積する。埋土から越前焼や燈明痕を持つ土師質皿、曲物の底板（第15図101）などが出土している。遺物包含層との層位関係から15・16世紀代の遺構である。

SE5（第7図） A 10で検出した。径1.1m、深さ0.5m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘削していない。1区と2区の境目に位置し、2区の遺物包含層上面で検出した。埋土上層には大量の礫が廃棄されていた。廃棄された礫は面を持った人頭大の自然石が多く、近接するSE 4と同じく石積み井戸であった可能性があるが、下半の様相は不明である。

埋土から越前焼（第12図16・19）や土師質皿、青磁皿（第13図68）などが出土しており、遺物の時期



第9図 土坑・井戸・小穴実測図（縮尺1/60）

から16世紀前半頃の遺構である。

SE6（第8図） A12で検出した。径1.1m、深さ0.8m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘削していない。断面図の右側面は崩落した。

埋土から木製品の箸やヘラ（第15図93・99・100）が出土している。

SE7（第9図） A14で検出した。径0.9m、深さ0.6m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘削していない。3層の黄褐色粘質土下位に、黒褐色・褐色粘質土が堆積する。

埋土から弥生～古墳時代の土器がわずかに出土しているが、周辺の遺構の分布状況を踏まえると遺構は中世の時期であろう。

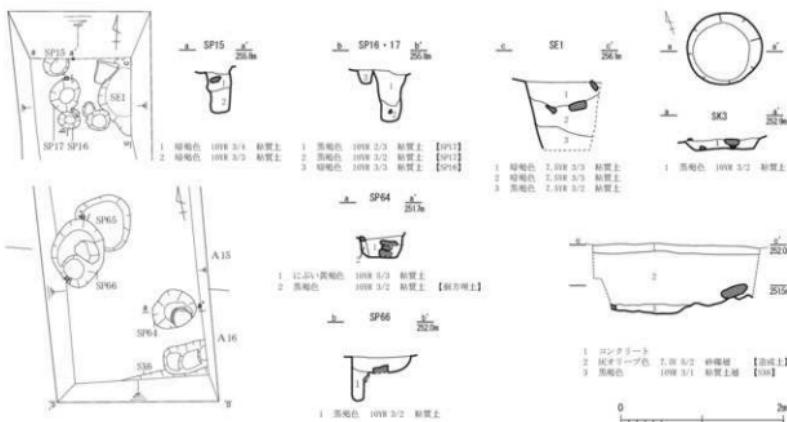
SE8（第9図） A14で検出した。径0.8m、深さ1.0m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘削していない。西側には大きな井戸の掘方がある。1・2層の黒褐色粘質土が3層の灰黄褐色粘質土を切り、その下位に褐灰色粘質土が堆積する。

埋土から白磁や青磁などが出土している。遺物の時期から15世紀代の可能性がある。

SE9（第9図） A14で検出した。径0.8m、深さ1.0m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘削していない。礫を含む暗褐色粘質土の3層下に、灰黄褐色粘質土が堆積する。

埋土から土師質皿が出土している。遺物の時期から15世紀後葉～16世紀前葉の遺構と考えられる。

SE10（第9図） A15で検出した。径1.3m、深さ1.0m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘



第10図 土坑・井戸・柱穴実測図（縮尺1/60）

削していない。西側には2段の井戸の掘方がある。埋土上部に認める1層の褐灰色粘質土には大量の礫が廃棄されており、2層の黄褐色粘質土とともに3層の黄褐色粘質土を切りこむ。出土遺物はない。

本調査区では調査区に比べ井戸の基数が多いのが特徴であるが、SE3を除き完掘しておらず下部は不明である。

SK3（第10図）A9で検出した。径0.9m、深さ12cmの円形の土坑である。埋土から土師質皿が出土している。

SK12（第8図）A・B13で検出した。径1.0m、深さ0.7mの円形の土坑である。2層の黒褐色粘質土内には自然面を残す直径約80cmの巨大な礫が埋まっていた。大きさや方形に近い形状であることなどから、石垣の積み石を埋めたもの可能性がある。15世紀後半頃の瀬戸焼の天目茶碗（第14図86）が出土している。

SK14（第7図）A10で検出した。長さ1.3m、幅0.8m、深さ16cmの隅丸長方形の土坑である。遺物包含層である黒褐色土層下の基盤層上面で検出した。遺構中央から横倒しの状態で木杭が出土したほか、越前焼（第12図5）や未同化の白磁壺の体部片、箸が出土している。遺物の時期やSE5との層位関係から、15・16世紀代の可能性がある。

図を掲載していないが遺物を定量含む土坑に、SK1・8・10・15・16・18などがある。

中世の遺構として以下の4基を取り上げた。

SK10はA14・15に位置する。長さ0.5m、幅0.3m以上、深さ0.3mを測る。16世紀前半頃の越前焼（第12図17）が同遺構とSP63から出土している。

SK15はA13・14に位置する。深さ0.1mで、SX3に切られる。SX3は15・16世紀代の遺構である。

SK16はA13に位置する。15世紀中頃の白磁壺と八角壺（第13図69・72）が出土している。

SK18はA14に位置する。深さ0.3mで、SE7に切られる。

近世の遺構として以下の2基を取り上げた。

SK1はA6に位置する（第6図）。長さ20m以上、幅1.6m、深さ0.9mを測る円形の土坑である。18世

紀代の土師質皿（第13図35）と肥前磁器碗（第14図83）が出土している。近世の遺構で、近現代に構築されたSA2に切られる。

SK8はA5に位置する。径1.2m、深さ0.3mを測る。18世紀代の越前焼（第12図18）や在地産鉄軸壺（第14図85）のほか、唐津碗など（第14図87）が出土している。近世の遺構である。

第4節 集石・落ち込み（第11図）

検出した集石遺構および落ち込み4基のすべてをここで報告する。

SX3 A13・14で検出した。平面形状は不整形で、調査区西壁に向かって段状に落ち込む遺構である。埋土からは多くの焼土や炭、礫や多くの土師質皿や越前焼（第12図10）や染付（第14図82）が出土している。遺物の時期から15・16世紀代の遺構である。

SX4 A11で検出した。遺物包含層間（第5図16・17層）で検出した集石遺構である。

第5図16層はSA6の基盤層である第5図19層につながるため、本遺構はSA6より古い時期の遺構である。またこの遺構の性格について、拳大～50cm程度の礫が面状に広がるが、平坦面を上に向ける石はほとんどない。加えて、現況では本遺構の上を伝柵の宮に通ずる道路が東西に通っているが、これは中世に遡る道路や区画境などであった可能性が高い。以上の点を踏まえると、本遺構はSA6構築以前の土塁の基礎部分の可能性が高い。なお、本遺構の基盤となす黒色土層（第5図17層）は遺物を含んでおり、本遺構面より下位にはさらに中世の生活面が残っていると考えられる。

SX5 A13・14で検出した。遺物包含層である黒褐色土層上で検出した集石遺構である。礫の大きさは不揃いで面も揃っていない。中世もしくは後世の造成に伴う遺構の可能性がある。

SX6 A16で検出した。調査区南壁に向かって落ち込んでいる。落ち込みの肩部は現敷地境に並行しているが、この地割の方位が中世に遡るのであれば、中世の区画溝の可能性がある。

第5節 工事立会区の遺構（第11図）

SV1 調査区東壁沿いに拳大の石をやや不規則に並べ、この石列から調査区内側方向へ突出するよう人に頭大の石を3つ並べている。人頭大の石の表面には、表面を整えるための加工がわずかに施されている。

石列の上位で焼土層（第11図6層）を確認しているため、16世紀代の遺構と推定される。

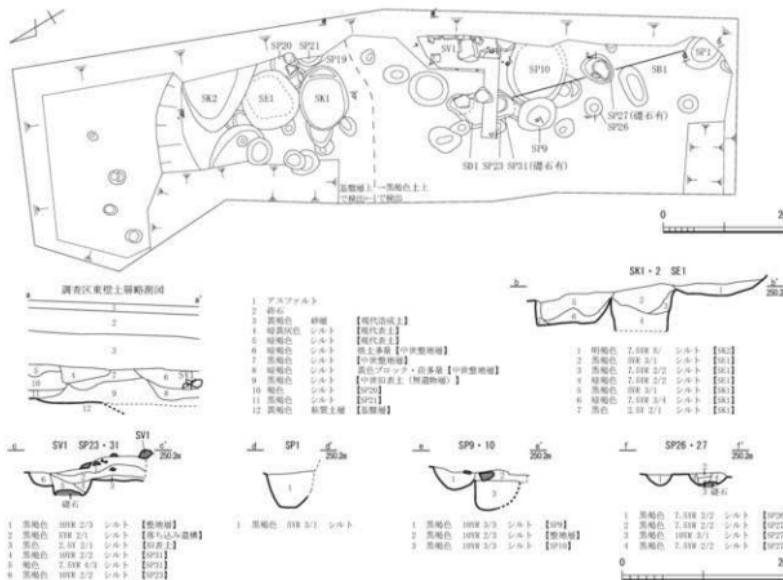
SB1 SP1・27・31で構成され、柱間1.75m、柱径約0.5mの掘立柱建物である。SP27・31は柱穴内に礎石が残る（深さ16～26cm）。SP1は礎石が抜き取られていると思われる。SP1・27・31は軸がややずれている。

SP27から土師質皿が出土しており、時期は14世紀以前の可能性がある。

SE1 径1.0m、深さ0.6m以上を測る素掘り井戸である。井戸底までは掘削していない。SK1・SK2とそれぞれ北・南接する。暗褐色・黒褐色・明褐色土の順に堆積する。

埋土から灰釉小皿（第19図125）や青磁などが出土している。遺物の時期から15・16世紀代の遺構の可能性がある。

SK1 径1.1m、深さ34cmの円形の土坑である。SE1に接するように掘削されていた。埋土には大量の焼土が含まれていた。石臼（第19図130）などが出土している。遺物の時期から15・16世紀代の遺構の可能性がある。



第11図 工事立会区実測図（縮尺1/60・1/80 土層略測図は縮尺不同）

SK2 長さ0.9m以上、幅1.3m以上、深さ0.2mの梢円形の土坑である。南に接する基盤層崖面を切岸状に削り取った際の痕跡である可能性がある。

埋土から越前焼などの小片が出土している。

SP9 径0.7m、深さ28cmで、**SP10**は径1.0m、深さ48cmである。

SP10 径の大きさから井戸の可能性もある。越前焼（第19図116）や土師質皿、銅鏡などが出土している。遺物の時期から13・14世紀代の遺構の可能性がある。

第5章 遺物

発掘調査により出土したうち図化した遺物は、1・2区が115点、立会調査が16点である。ここでは、遺物の大半を占める中世の遺物を中心に説明する。

中世に属する遺物としては、越前焼、瓦質土器、土師質皿、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、木製品、金属製品、石製品などが挙げられる。土器・陶磁器類で出土量が多いのは土師質皿と貯蔵・調理具の越前焼で、瀬戸・美濃焼や輸入陶磁器など供膳具がこれに次ぐ。

これらの遺物の出土比率は、これまで平泉寺で行われてきた発掘調査での遺物の出土比率とほぼ同様の傾向を示す。

第1節 1・2区出土遺物（第12～18図）

越前焼（第12図1～18） 1～5は越前焼の壺である。1は木村編年のⅡ3期（13世紀後半頃）と考えられる（福井県2016）。表採遺物である。2は口縁部が狭い受け口状を呈し、口縁部下端が鋭く尖る。木村編年のⅢ1期（14世紀中頃）のものである。SX3から出土した。3は口縁部下端の稜が痕跡的で、口縁端部上端は外反し丸みを帯びる。内面に強い凹線が巡る。木村編年のⅣ2期（15世紀前半）であろう。SE3から出土した。4は口縁端部が丸みの強い方頭状を呈する。木村編年のⅣ3期（15世紀後半）で整地層から出土した。5は口縁部が四角く肥厚し、外面には稜が明瞭に巡る。木村編年のV2期（16世紀前半）と思われる。SE1から出土した。

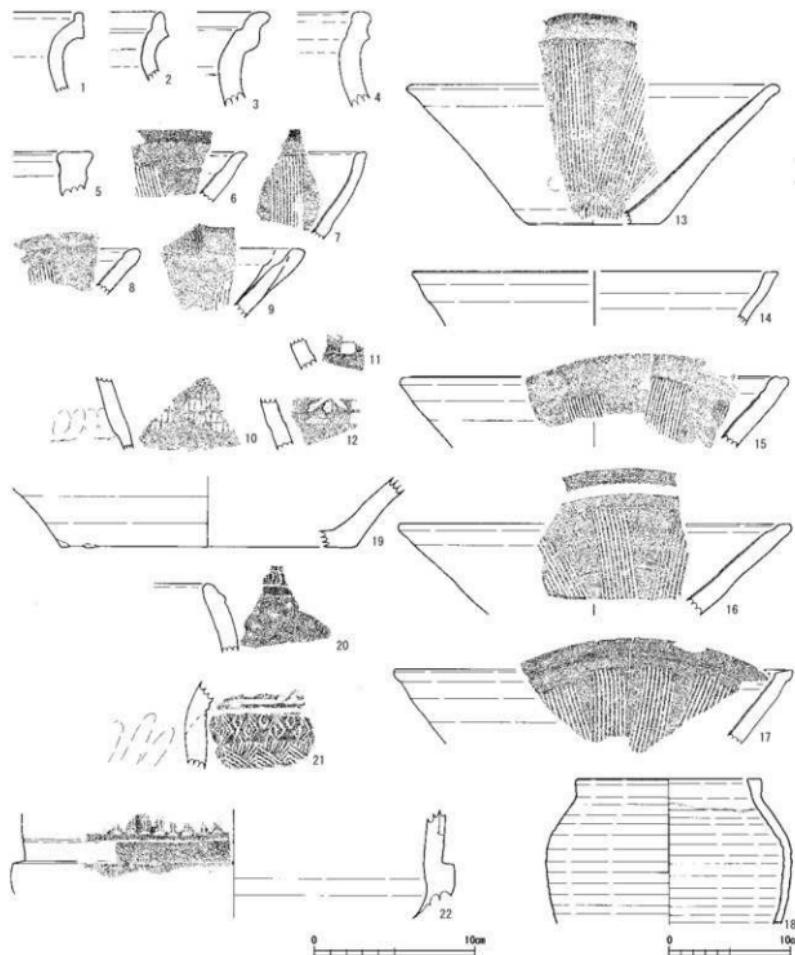
10～12は押印を施した越前焼の壺である。10は長方形の格子目が帯状に連なる。13世紀中頃と考えられる。SX3から出土した。11・12は凹の「本」と格子目の組み合わせと思われる。16世紀代と考えられる。11はSE2、12はSE3から出土した。

6～9・13・15～18は擂鉢である。6・7は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部上面が内傾する。擂目が内側の凹線で留まる。木村編年のⅣ3期（15世紀後半）のもので、いずれも黒色土から出土した。8は口縁部上面が内傾し、擂目が内面の浅い四線で留まる。木村編年のV1期頃（15世紀末～16世紀初頭）と考えられる。整地層から出土した。9は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部上面がわずかに内傾し、片口がある。擂目が内側の凹線よりも手前で留まる。黒色土から出土した。13は口縁部が内傾し丸まり、擂目が内側の痕跡的な凹線上に留まる。15世紀後半頃のものである。整地層から出土した。15は口縁部が直線的に立ち上がり、丸く肥厚する口縁部上面に沈線が巡る。擂目が内側の凹線で留まる。木村編年のIV2期頃（15世紀前半）と考えられる。調査区東壁およびSK14から出土した。16は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部上面が内傾する。内面は強いナデによる凹線が巡り、間隔の広い擂目が入る。木村編年のV1期頃の（15世紀末～16世紀初頭）のものである。SE5から出土した。17は口縁部断面が三角形を呈する。内面には間隔の広い擂目が入る。木村編年のV1期頃（15世紀末～16世紀初頭）と考えられる。SK10およびSP63から出土した。

14は鉢である。灰色土層から出土した。

18は壺である。ロクロ挽き成形で、内外面にロクロ目が顕著に残る。外面に赤土を施す塗り土技法を用いる。18世紀末頃のものである。SK8から出土した。

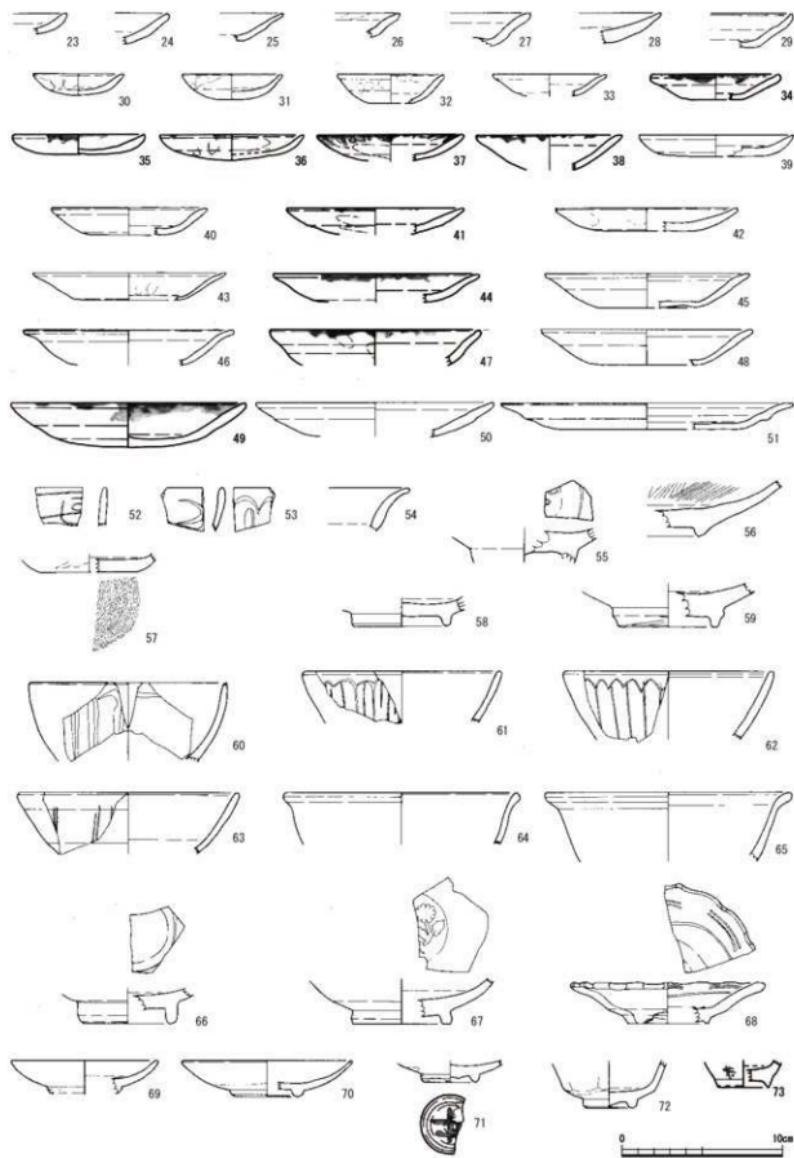
19は壺の底部で、外面に縦方向のヘラナデ痕、内面に指頭圧痕を認める。内面に自然軸がみられる。



第12図 出土遺物実測図（1）（1～19：縮尺1/4、20～22：縮尺1/3）

SE5 から出土した。

瓦質土器（第12図20～22） 20は円形浅型の火鉢である。内湾する口縁部には凸帯が巡る。肩部に雷文の押印と突帯が巡る。SP121から出土した。21は風炉である。下には段を持つ凸帯が巡り、その下には重菱形文のほか、内部に線刻を持つ文様を組み合わせた方形帶を施す。内面に指頭圧痕を認める。SX1 から出土した。22も風炉と考える。体部に方形状の太い凸帯が巡り、上部に断面三角形の縦状の突起が連続して巡る。

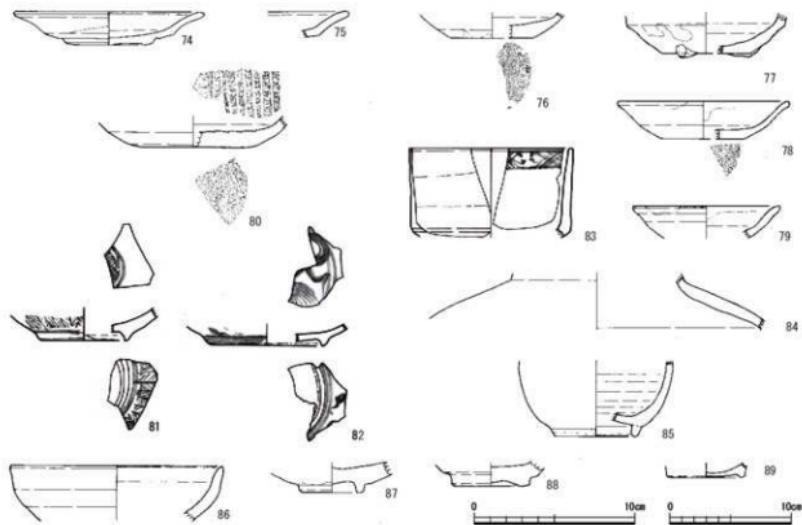


第13図 出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）

土師質皿 (第13図23~51) 23は丸底で口縁が内湾する、浅い器形である。富山編年D類とみられる。SE 2から出土した。24は器壁が厚めであり、口縁部を細く収める。富山G類で、15世紀と考えられる。SP63から出土した。25は口縁部が緩やかに立ち上がり2段ナデを施す。口縁部が若干外反する。11世紀後半~12世紀前葉と考えられる。灰褐色土から出土した。26は口縁部が直線的に立ち上がり、1段ナデを施す。口縁端部を丸く収める。13世紀後葉~14世紀前葉と考えられる。SP62から出土した。27は器壁が厚く、口縁部が緩やかに立ち上がり、1段ナデを施す。口縁端部を摘み上げ、弱いナデを施す。黒褐色土から出土した。28は浅くほとんど平らな器形である。整地層から出土した。29は口縁部に2段ナデを施し、口縁端部を丸く収める。黒色土から出土した。30は浅い器形で口縁端部は丸みを持つ。SP59から出土した。31は底部が厚く碗型である。富山G類で、15世紀頃と考えられる。SX 3から出土した。32は浅い器形で、口縁部に丸みを持つ。SP63から出土した。33は横ナデを施す。口縁端部が外反する。富山F類に該当するものと考えられる。SP22から出土した。34は口縁部が緩やかに立ち上がる。横ナデを施し、口縁部を丸く収める。調査区西壁から出土した。35・36は内型成型で、35は底部外面に板状痕を認める。35はSK 1、36はSK 8から出土した。18世紀中頃から認める。37は口縁部に指頭圧痕を認める。SE 4から出土した。朝倉C類・富山G類に該当する。38は口縁部が内湾し、口縁端部のみ外反する。SE 3から出土した。39は厚手の器壁を持ち、口縁端部は細くすぼまる。富山G類で15世紀と考えられる。SP15・17から出土した。40は口縁部に弱い横ナデを施す。わずかに外反する。富山F類に該当する。SP89から出土した。41はユビ押さえと弱い横ナデを施す。富山F類で、15世紀後半~16世紀初頭のものである。SP113から出土した。42はやや厚みを持ち、口縁端部は細く収まる。富山G類で、15世紀と考えられる。SE 3から出土した。43は口縁部が直線的で、端部を細く収める。富山F類で、15世紀と考えられる。SE 5から出土した。44は口縁部がやや外反し横ナデを施す。SA 6から出土した。45は見込みナデ、口縁部にナデを施す。口縁部はゆるく外反して内面に平坦面を作る。SE 8から出土した。富山F類に該当しよう。46は見込みナデ、口縁端部は外反する。SK18から出土した。富山F類で、15世紀末~16世紀初頭と考えられる。47はやや厚めの器壁を持ち、強めの横ナデとユビ押さえの痕跡を残す。口縁端部は細くすぼまる。富山F類の可能性がある。整地層から出土した。48は器壁が薄く口縁部に横ナデを施す。SE 3から出土した。朝倉D類で16世紀頃と考えられる。49は強めの横ナデで口縁が窪む。口縁部はやや厚みを持つ。口縁上部に煤が付着する。朝倉D類・富山F類で、15世紀後半~16世紀初頭と考えられる。SE 9から出土した。50は強めの1段ナデで、49同様口縁下に明瞭な段を持つ。朝倉D類で16世紀頃と考えられる。SA 2の裏込め層から出土した。51は口縁部を2段ナデし、見込みにもナデを施す。体部に明瞭な段を形成するナデの強さに、奥越地方の地域性を強く認める。富山F類で、15~16世紀のものであろう。SE 3から出土した。34~38・41・44・47・49は灯油痕が付く灯明皿で、15世紀から認める。

青磁 (第13図52~68) 52・53・55・58・60~67は青磁碗である。52は口縁部に雷文帯を施す。53は口縁部外面にいぶい蓮弁文、内面に草花文を持つ。55は全面施釉後、高台内面の途中まで軸を削り取る。内面の見込みには界線がめぐる。15世紀後半と考えられる。58は碗と考える。内外面全体に施釉し高台内面の軸をはぎ取る。15世紀頃と推定される。60~62は外面に蓮弁文を施す。15世紀後半に認める。63は口縁が直に収まるタイプの碗で、外面に痕跡的な線描蓮弁文を認める。

64・65は端反碗である。64は14世紀前半から15世紀初頭頃まで続く息の長い器種である。65は全体に釉薬が厚くかかる。66は外面高台の豊付から内側にかけ軸をはぎ取る。見込み界線が一本巡る。67は内



第14図 出土遺物実測図（3）(74~84・86~89：縮尺1/3、85：縮尺1/4)

外面に施釉し、高台内面の釉をやや粗くはぎ取る。見込に菊花文のスタンプがある。

59は鉢と思われる。高台内面の釉を剥ぎ取る。高台上部にわずかな突起が巡る。

54・56・57・68は青磁皿である。54は端反皿である。14世紀前半と推定される。56は高台内面の釉を剥ぎ取り、体部内面全体にハケ目文様を施す。57は外面底部に回転糸切り痕を認める。内面は全体に施釉する。68は端反稜花皿である。内外面に施釉し高台を弧状に抉り込む可能性がある。体部から底部の断面に漆締ぎが残る。

白磁（第13図69～73） 69～71は白磁皿である。69は内湾して口縁部に至る。内外全面に施釉し見込に重ね焼きの痕が残る。70も同形態の皿であるが、体部外面下位と底部は露胎である。71は露胎の高台内面に「井」の墨書を認める。これらは森田D群（15世紀後半）である。

72は八角杯である。体部下位から兜布の残る高台内面は露胎である。体部外面は工具を用いて、鋭角に八角形を形成する。

73は小壺である。内外全面に施釉する。

染付（第14図81～83） 81はいわゆる蓮子碗である。広く開いた体部を持ち、見込が高台に向けてやや凹む器形をもつ。高台上部に1条の界線、体部に芭蕉文を描く。見込にも2重界線内に文様を認めるが、残存部が少なく詳細は不明である。小野分類のC群にあたる（小野1982）。

82は小野B群1の端反皿である。高台疊付は露胎である。外面に唐草文、見込に黒みを帯びる青絵で玉取獅子を描く。高台と見込に2条の界線が巡る。SX3から出土した。

83は半筒碗である。直立する体部の外面は無文で、口縁内面には四方櫻文を描く。18世紀後半のものである。SK1から出土した。

瀬戸・美濃焼 (第14図74~80・86・88・89) 74・75は端反皿である。74は強い回転ナデにより、口縁部が強く外反する。腰部と高台を削り出すが、高さは低い。口縁外面と体部内面に灰釉を施す。75も同形態で施釉範囲も共通する。大窯II期のものと考えられる。

76・77は香炉の底部である。ともに底部外面に回転糸切り痕が残る。77の底部には团子状の脚があり、本来は三脚であったと思われる。

80は鉢皿である。底部外面に回転糸切り痕が残る。

78は鉄釉皿である。口縁部はわずかに外反し、端部に鉄釉を施す。底部外面に回転糸切り痕が残る。古瀬戸後段階のものであろう。SE 2から出土した。

79は綠釉小皿である。口縁部に施釉が認められる。古瀬戸後段階IV期のものである。

86は天目茶碗である。やや内湾する体部から直立気味の口縁に至る。古瀬戸後段階IV期のものである。SK12から出土した。

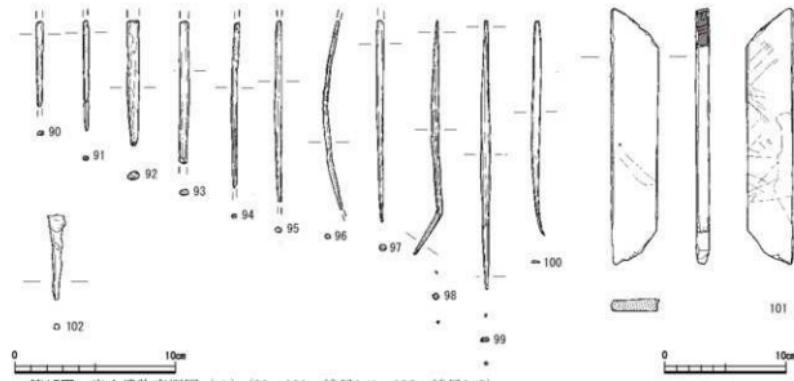
88・89は天目茶碗の底部である。88は内反り高台を持つ。大窯II期のものである。89は輪高台を持つ。高台とその内面に濃い鉄釉を認める。大窯I期のものである。それぞれSK 8・SP35から出土した。

その他の陶磁器 (第14図84・85・87) 84は鉄釉壺である。外面に鉄釉がかかる。内面は露胎で中国産の可能性がある。SA 2から出土した。

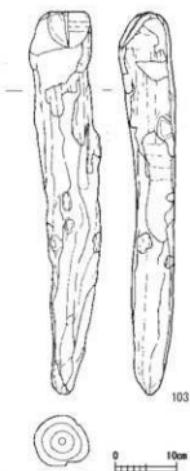
85は鉄釉壺である。外面の壺付と体部内面を除き施釉する。内面はやや成形痕が目立つ。近世のもの可能性がある。SK 8から出土した。

87は唐津の碗と考えられる。兜の残る高台内面と腰部を除き灰釉を施す。内面に重ね焼き時の砂目痕がある。17世紀前半のものでSK 8から出土した。

木製品 (第15図90~101、第15図103、第16図103) 90~99は箸である。90・91・94~96は丸みを帯びた断面形状を呈し、91と96は接合する。92は表面に細かい削りを入れることで多面を形成する。93についても細かい削りがあり、断面形状がやや歪な多角形か楕円形を呈する。97は表面に規則的な削りを入れており、断面形状は八角形を呈する。完形のものは98・99の2点のみである。両者は長さがそれぞれ19.8cmと22.1cmを測り、99は表面と裏面を両端に向かって削った後に、細かい削りを入れている。両者



第15図 出土遺物実測図 (4) (90~101: 縮尺1/4、102: 縮尺1/3)



第16図 出土遺物実測図(5)
(縮尺1/8)

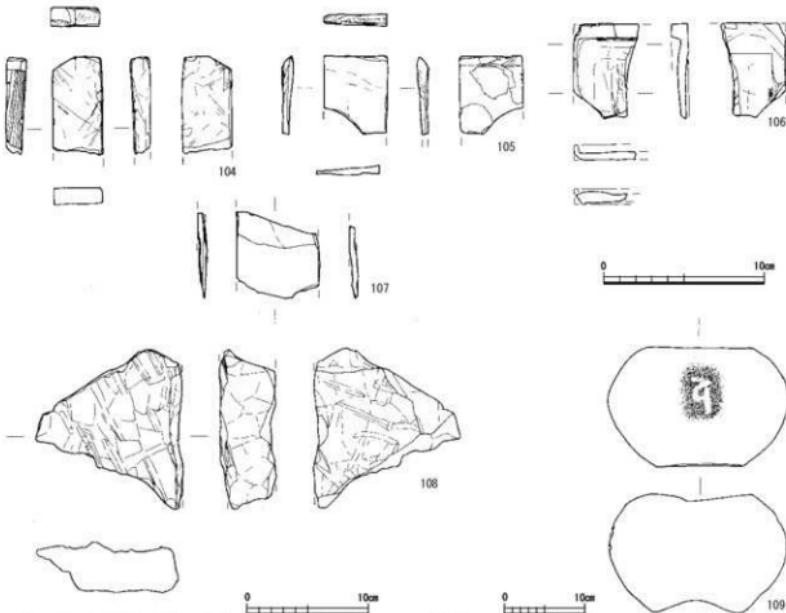
とも両端を尖らせた両口箸であり、断面形状は四角形から六角形までの多角形を呈する。91・94~98はSE 3から出土し、90はSK14、92はSK18、93・99・100はSE 6から出土した。100はヘラの可能性がある。片側の端をやや折り曲げており、断面形状は、扁平な長方形を呈する。SE 6から出土した。

101は曲物の組み木作りの底板の一部である。柾目材を用いている。片面に多数の切り傷があることから、まな板としても使用されたものと考えられる。もう片面には釘穴とみられる穴を1箇所認める。SE 4から出土した。

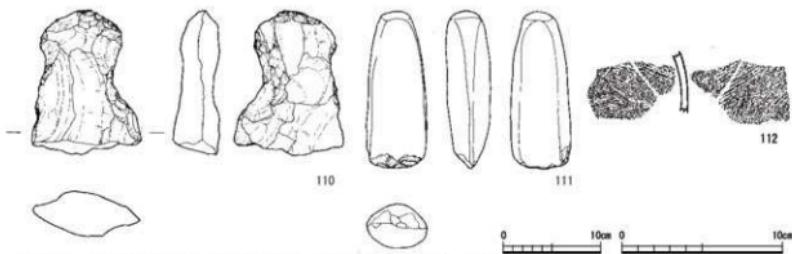
103は木杭である。長さ約63cm、太さ約8~10cmを測る芯材である。片端を細く削り込み、一方の片端附近には部分的に樹皮が残る。SK14から出土した。

金属製品 (第15図102) 102は巻頭の角釘である。

石製品 (第17図104~109) 104・105は砾石である。いずれも仕上げ砾石で材質は凝灰岩類である。104の左側面に自然剥離面と工具痕がある。105は左側面が斜めに削られ、上面は反る。灰黒色土、黒褐



第17図 出土遺物実測図(6) (104~107: 縮尺1/3, 108: 縮尺1/4, 109: 縮尺1/6)



第18図 弥生時代以前の出土遺物実測図 (112: 縮尺1/3、110・111: 縮尺1/5)

色土からそれぞれ出土した。

106は硯である。材質は結晶片岩である。小型品で海が深く、裏面には低い脚を認める。黒色土から出土した。

107は砥石の可能性もあるが、角を面とりしているため硯の可能性が高い。材質は粘板岩である。褐色土から出土した。

108は板石とみられる。材質は笏谷石である。SX 4直上から出土した。

109は五輪塔の水輪である。变成氣味の安山岩である。梵字が刻まれる。調査区西壁から出土した。

弥生時代以前の出土遺物 (第18図110~112) 110は打製石斧である。分銅形で、材質は安山岩である。上端の一部が敲打による加工があるものの、おむね剥離により二次加工を施す。表土から出土した。

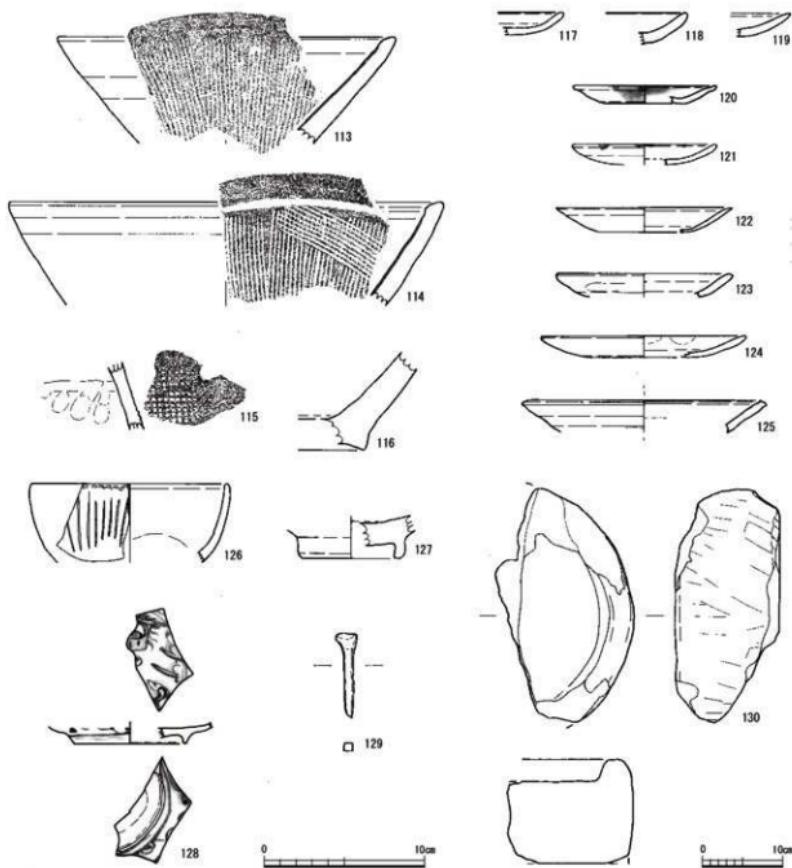
111は太型船刃石斧である。材質は安山岩である。SA 2の裏込め層から出土した。

112は弥生土器である。弥生中期の壺もしくは壺と考えられる。器壁が薄く、内外面にハケ目を施す。胎土が細かいため在地品ではなく、濃尾平野周辺部からの搬入品の可能性が高い。

第2節 工事立会区出土遺物 (第19図)

越前焼 (第19図113~116) 113・114は越前焼の擂鉢である。いずれも口縁部が内傾し、口縁部下に沈線が巡る。木村編年V 3期 (16世紀後半頃) と考えられる。113は調査区東壁の褐色ブロック混じりの整地層から、114は壁崩落土から出土した。116は片口鉢である。高台が形骸化している。高台上に回転ヘラ削りを施す。木村編年II 3期 (13世紀末~14世紀初頭頃) と考えられる。SP10から出土した。115は押印を施した越前焼の壺である。押印は長方形の刻印からなる方形状を呈する。13世紀後半と考えられる。表土から出土した。

土師質皿 (第19図117~124) 117は浅い器形を持つ。富山D類で、13~14世紀と考えられる。SP27から出土した。118は器壁が厚い。119は口縁端部に向かって細く収まる。いずれも富山G類で、14~15世紀と考えられる。それぞれSK 2、SP30から出土した。120は身が浅い。SE 1から出土した。121は口縁端部を摘み上げる。15~16世紀と考えられる。SE 1から出土した。122は口縁端部がやや外反気味に細く収まる。16世紀と考えられる。SK 1から出土した。123は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。富山C類で、13世紀のものと考えられる。SP10から出土した。124は浅い器形で、近世のものと考えられる。茶褐色土層から出土した。



第19図 立会調査出土遺物実測図 (113-129: 縮尺1/3、130: 縮尺1/6)

瀬戸・美濃焼 (第19図125) 125は鉢皿である。口縁上面が外傾する。口縁内外面に灰釉を施す。古瀬戸後期段階で、14・15世紀頃と考えられる。SE 1から出土した。

青磁 (第19図126・127) 126・127は青磁碗である。126は外面に線描蓮弁文を施す。16世紀のものである。SP22から出土した。127は、高台内面と見込の釉を剥ぎ取る。包含層から出土した。

染付 (第19図128) 128は皿で、見込に竜、外面に唐草文を描く。包含層から出土した。

金属製品 (第19図129) 129は扁平頭の角釘である。SP19から出土した。

石製品 (第19図130) 130は花崗岩製の粉挽き白である。上面にくぼみがあるため上白とみられるが、供給口は残っていない。下面に刻まれる目は摩耗しており、確認できない。SK 1から出土した。

参考文献

- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 「越前焼総合調査事業報告」福井県埋蔵文化財調査センター所報6
藤澤良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」「財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第10輯 財団法
人瀬戸市埋蔵文化財センター
富山正明 1997 「越前国における13~16世紀の土師器編年」「中・近世の北陸—考古学が語る社会史一」 桂書房
森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究 第2号」 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究 第2号」 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究 第2号」 日本貿易陶磁研究会

第2表 越前焼観察表 ()は推定・残存値

件名 番号	地区	造様	層位	器種	法量 (cm)		成形・装飾技法		土	色調		造成	残存率	備考		
					口径	底径	高さ	表面		外見	内面					
1	-	-	表層	甕	-	(6.6)	口・体【ねじたて成形	口・体【ねじたて成形	1~2mmの 茶色砂約3%	SYR5/1	2.5SYR5/1 灰褐色	良	-	II2		
2	A13- 14	SX3	-	甕	-	(5.7)	口・体【ねじたて成形	口・体【ねじたて成形	1~2mmの 茶色砂約3%	TAN77/6 標準	7.2SYR6/6 浅黃褐色	良	-	III1		
3	A7	SE3	-	甕	-	(7.8)	口・体【ねじたて成形	口・体【ねじたて成形	1mmの白色砂約5%	SYR6/6 標準	2.5SYR6/6 褐色	良	-	IV2		
4	A14	-	表地層	甕	-	(7.3)	口・体【ねじたて成形	口・体【ねじたて成形	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/6 標準	7.2SYR7/4 にぶい褐色	良	-	IV2		
5	B1	SE1	-	甕	-	(3.7)	口・体【ねじたて成形	口・体【ねじたて成形	1mmの白色砂約1%	TAN77/6 標準	7.2SYR7/2 灰褐色	良	-	V3		
6	A10	-	黒色土	罐鉢	-	(4.1)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1mmの白砂約1%	SYR5/6 標準	2.5SYR5/6 明黄色	良	-	IV3		
7	A10	-	黒色土	罐鉢	-	(7.2)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/3 標準	7.2SYR5/2 灰褐色	良	-	IV3		
8	A10	-	表地層	罐鉢	-	(3.7)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1mmの白色砂約3%	TAN77/1 標準	2.5SYR1/1 褐色	良	-	V1		
9	A10	-	黒色土	罐鉢	-	(5.8)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1mmの白色砂約1%	TAN77/3 標準	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや 不良	-	III1		
10	A13- 14	SX3	-	甕	-	(6.8)	体丁子【圓窓	体丁子【圓窓	1~2mmの 白色砂約1%	TAN77/6 標準	10YR7/3 にぶい黄褐色	7.2SYR4/3 褐色	良	-		
11	A6-7	SE2	-	甕	-	(2.7)	印文印文	体丁子【圓窓	1mmの茶色砂約3%	TAN77/1 標準	10YR7/1 にぶい黄褐色	2.5SYR1/1 褐色	良	-		
12	A7	SE3	-	甕	-	4.2	体丁子【圓窓	体丁子【圓窓	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/2 標準	10YR7/2 灰褐色	良	-	-		
13	A10	-	表地層	罐鉢	(29.4)	(10.8)	口・体【クロコ成形 横縞三川あり	口・体【クロコ成形 横縞三川あり	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/6 標準	10YR7/2 灰褐色	良	-	IV3		
14	A14	-	灰褐色	片口鉢	(30.0)	(4.5)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/6 標準	10YR7/2 灰褐色	口1.1/12 底1.5/12	IV3	II3		
15	A10	SK14	実継	罐鉢	(30.0)	(5.8)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1mm以下の白砂 約2%	TAN77/3 標準	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや 不良	口1.8/12	II3		
16	A10	SE5	-	罐鉢	(32.0)	(7.5)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/6 標準	10YR6/6 明黄色	良	口1.3/12	V1		
17	A14- 18	SK10- SP63	-	罐鉢	(32.8)	(6.1)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1mm以下の白砂 約2%	TAN77/6 標準	10YR6/6 明黄色	口2.4/12	V1	-		
18	A5	SK8	-	甕	(15.0)	(13.0)	口・体【クロコ成形 鉢底全周崩	口・体【クロコ成形 鉢底全周崩	1~2mmの 白色砂約2%	TAN77/2 標準	10YR6/2 灰褐色	良	口2.1/12	V1	-	
19	A10	SE5	-	甕	-	24.4	6.0 (6.0) 体・底【ねじたて成形	体・底【ねじたて成形	1mmの 白色砂約1%	TAN77/3 標準	10YR7/3 灰褐色	良	底1.4/12	-	-	
20	-	立会	-	罐鉢	(27.0)	(8.7)	口・体【クロコ成形	口・体【クロコ成形	1mmの 白色砂約1%	TAN77/4/1 砂約5%度	10YR7/1 灰褐色	やや 不良	口1.9/12	V3	-	
21	A6	SX1	-	瓦質土器 灰黒	-	-	(5.3)	直腹形文を模続印	回転ナダ 押正痕あり	1mm以下の白砂 約2%	TAN77/8 砂約5%度	10YR5/8 にぶい褐色	やや 不良	口1.4/12	V3	-
22	A12	-	黒色土	瓦質土器 灰黒	-	-	(5.7)	回転ナダ	回転ナダ	1mm以下の白砂 約2%	TAN77/2 砂約5%度	10YR5/2 灰褐色	良	-	-	-
23	A6-7	SE2	-	土師質	-	(1.2)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約7%	TAN77/3 砂約5%度	7.5SYR8/3 浅黃褐色	良	-	-	-	
24	A15	SP63	-	土師質	-	(1.9)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mmの 黑色砂約2%	TAN77/4 砂約5%度	SYR8/4 にぶい褐色	良	-	-	-	
25	A13	-	灰褐色土	土師質	-	(1.7)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/3 砂約5%度	7.5SYR7/3 にぶい褐色	良	-	-	-	
26	A14	SP62	-	土師質	-	(1.8)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/4 砂約5%度	SYR7/4 にぶい褐色	良	-	-	-	
27	A10	-	黒色土	土師質	-	(2.0)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/7 砂約5%度	7.5SYR7/7 にぶい褐色	良	-	-	-	
28	A10	-	表地層	土師質	-	(1.8)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/6 砂約5%度	7.5SYR7/6 にぶい褐色	良	-	-	-	
29	A10	-	黒色土	土師質	-	(2.1)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約3%	TAN77/6 砂約5%度	7.5SYR6/6 にぶい褐色	良	-	-	-	
30	A13	SP69	-	土師質	(3.0)	(3.6)	1.3 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/6 砂約5%度	7.5SYR6/4 にぶい褐色	良	口2.3/12 底2.5/12	-	-	
31	A13- 14	SX3	-	土師質	6.0	(2.6)	1.6 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約3%	TAN77/4 砂約5%度	7.5SYR6/4 にぶい褐色	良	口4.5/12 底12/12	-	-	
32	A15	SP63	-	土師質	(6.4)	-	1.8 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/4 砂約5%度	7.5SYR7/4 にぶい褐色	良	口2.4/12	-	-	
33	A7	SP22	-	土師質	(7.0)	-	1.4 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約3%	TAN77/4 砂約5%度	7.5SYR7/3 浅黃褐色	良	口2.3/12	-	-	

第3表 瓦質土器観察表 ()は推定・残存値

件名 番号	地区	造様	層位	器種	法量 (現在値: cm)		装飾		土	色調		造成	備考		
					口径	底径	高さ	表面		外見	内面				
20	A10	SP121	-	瓦質土器 大口	-	-	(4.2)	口・重文	1mm以下の白砂 約2%	10YR4/1 砂約5%度	10YR7/1 灰褐色	やや 不良	口1.9/12 全体的に断れ着	-	
21	A6	SX1	-	瓦質土器 灰黒	-	-	(5.3)	直腹形文を模続印	回転ナダ 押正痕あり	1mm以下の白砂 約2%	10YR5/8 砂約5%度	10YR5/8 にぶい褐色	やや 不良	口1.4/12	V3
22	A12	-	黒色土	瓦質土器 灰黒	-	-	(5.7)	回転ナダ	回転ナダ	1mm以下の白砂 約2%	10YR5/2 砂約5%度	10YR5/2 灰褐色	良	-	-

第4表 土師質皿観察表 ()は推定・残存値

件名 番号	地区	造様	層位	器種	法量 (cm)		装飾		土	色調		造成	残存率		
					口径	底径	高さ	表面		外見	内面				
23	A6-7	SE2	-	土師質	-	-	(1.2)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約7%	TAN77/3 砂約5%度	7.5SYR8/3 浅黃褐色	良	-	-
24	A15	SP63	-	土師質	-	-	(1.9)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mmの 黑色砂約2%	TAN77/4 砂約5%度	SYR8/4 にぶい褐色	良	-	-
25	A13	-	灰褐色土	土師質	-	-	(1.7)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の白砂 約1%	TAN77/3 砂約5%度	7.5SYR7/3 にぶい褐色	良	-	-
26	A14	SP62	-	土師質	-	-	(1.8)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/4 砂約5%度	SYR7/4 にぶい褐色	良	-	-
27	A10	-	黒色土	土師質	-	-	(2.0)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/7 砂約5%度	7.5SYR7/7 にぶい褐色	良	-	-
28	A10	-	表地層	土師質	-	-	(1.8)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/6 砂約5%度	7.5SYR7/6 にぶい褐色	良	-	-
29	A10	-	黒色土	土師質	-	-	(2.1)	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約3%	TAN77/6 砂約5%度	7.5SYR6/6 にぶい褐色	良	-	-
30	A13	SP69	-	土師質	(3.0)	(3.6)	1.3 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/6 砂約5%度	7.5SYR6/4 にぶい褐色	良	口2.3/12 底2.5/12	-	-
31	A13- 14	SX3	-	土師質	6.0	(2.6)	1.6 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約3%	TAN77/4 砂約5%度	7.5SYR6/4 にぶい褐色	良	口4.5/12 底12/12	-	-
32	A15	SP63	-	土師質	(6.4)	-	1.8 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約1%	TAN77/4 砂約5%度	7.5SYR7/4 にぶい褐色	良	口2.4/12	-	-
33	A7	SP22	-	土師質	(7.0)	-	1.4 回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	回丁ナダ 底・盆丁子【圓窓	1mm以下の 黑色砂約3%	TAN77/4 砂約5%度	7.5SYR7/3 浅黃褐色	良	口2.3/12	-	-

件名 番号	地区	遺構	層位	器種	法量(cm)			調査		出土	色調		備考	残存率
					口径	底径	高さ	外面	内面		外面	内面		
34	-	-	西壁	土師質 灰明土	(7.0)	(2.0)	1.6	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	SV97/4 SV97/3 SV97/2 SV97/1	良	(口)2.6/12 (底)2.5/12	
35	A6	SK1	-	土師質 灰明土	(8.0)	(5.0)	(1.2)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	10V98/3 10V98/2 10V98/1	良	(11)2.2/12 (底)6/11	
36	A5	SK8	-	土師質 灰明土	8.8	3.8	1.6	回しナデ 底・底】+成形	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/4 SV97/3 SV97/2 SV97/1	やや 良	(11)1/12 (底)10.2/12	
37	A9	SE4	-	土師質 灰明土	(8.9)	-	(1.6)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒3%	10V98/2 10V98/1	良	(口)2.8/12	
38	A7	SE3	-	土師質 灰明土	(8.0)	-	(2.1)	回しナデ 口】+まみ上げ	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	10V97/2 10V97/1	良	口)4/12	
39	B1	SP 15-17	-	土師質	(9.5)	(6.0)	1.4	回しナデ 口】+まみ上げ	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV98/4 SV98/3 SV98/2 SV98/1	良	(口)1.8/12 底)2.2/12	
40	A13	SP99	-	土師質	(9.4)	(5.0)	1.6	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	SV98/2 SV98/1 SV98/0	良	(口)3.2/12 (底)2/12	
41	A12	SP 113	-	土師質 灰明土	(10.0)	-	(1.6)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	SV98/3 SV98/2 SV98/1	良	口)1.6/12	
42	A7	SE3	-	土師質	(11.0)	(7.0)	1.4	全体ナデ 底・底】+成形	全体ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒3%	10V97/4 10V97/3 10V97/2 10V97/1	やや 良	(口)0.7/12 (底)2.3/12	
43	A10	SE5	-	土師質	(11.0)	(6.0)	1.7	回しナデ 口】+まみ上げ	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/2 SV97/1	良	(口)1.7/12 (底)1.7/12	
44	A10	SA6	-	土師質 灰明土	(12.0)	-	(1.7)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 白砂粒2%	SV98/4 SV98/3 SV98/2 SV98/1	良	(口)1.2/12	
45	A14	SE8	-	土師質	(12.0)	(5.0)	2.1	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒3%	SV98/3 SV98/2 SV98/1	良	(口)1.6/12 底)3.5/12	
46	A14	SK18	-	土師質	(12.0)	-	(2.0)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	SV97/3 SV97/2 SV97/1	良	(口)1.7/12	
47	A10	-	壁地層	土師質 灰明土	(12.0)	-	(2.2)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 白砂粒2%	SV98/4 SV98/3 SV98/2 SV98/1	良	口)1.5/12	
48	A7	SE3	-	土師質	(13.0)	(6.0)	-	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回転ナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒3%	SV97/4 SV97/3 SV97/2 SV97/1	良	(口)1.3/12 (底)1/12	
49	A14	SE9	-	土師質 灰明土	(14.0)	(8.0)	2.7	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1~2mmの摩擦 白砂粒2%	SV98/4 SV98/3 SV98/2 SV98/1	良	(口)4.8/12	
50	A6	SA2	-	土師質	(14.0)	-	(2.1)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/3 SV97/2 SV97/1	不良	口)1/12	
51	A7	SE3	-	土師質	(17.0)	(11.0)	(1.6)	回しナデ(260) 底・底】+ナデ調整	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/4 SV97/3 SV97/2 SV97/1	良	(口)1.2/12 (底)1.5/12	
117	-	立会	-	土師質	-	-	(1.4)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	SV98/6 SV98/5 SV98/4 SV98/3	良	-	
118	-	立会	-	土師質	-	-	(1.9)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/4 SV97/3 SV97/2 SV97/1	やや 不良	-	
119	-	立会	-	土師質	-	-	1.4	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1~2mmの表面 砂粒2%+粘土	SV98/4 SV98/3 SV98/2 SV98/1	やや 不良	-	
120	-	立会	-	土師質 灰明土	(8.0)	(4.0)	(1.1)	回しナデ 口】+まみ上げ	回しナデ 見】ナデ調整	1mm以下の表面 白砂粒2%	SV97/3 SV97/2 SV97/1	良	(口)2/12 底)1/12	
131	-	立会	-	土師質 灰明土	(8.0)	-	1.25	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/2 SV97/1	良	(口)1.3/12	
132	-	SK1	-	土師質	(10.0)	(5.0)	1.5	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒3%	SV98/3 SV98/2 SV98/1	やや 不良	(底)1.1/12	
133	-	立会	-	土師質	(10.0)	-	(1.4)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回転ナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	10V97/3 10V97/2 10V97/1	やや 不良	(口)2.5/12	
134	-	立会	-	土師質	(12.0)	(5.0)	(1.3)	回しナデ 底・底】+ナデ調整	回しナデ	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	SV97/3 SV97/2 SV97/1	良	(口)1.5/12	

第5表 陶磁器観察表 ()は推定・残存値

件名 番号	地区	遺構	層位	種類	器種	法量(cm)			成型・調査技法・特徴		出土	備考	残存率	
						口径	底径	高さ 残存位置	外面	内面				
S2	A10	-	黒色土	青磁	瓶	-	-	(2.4)	口】クロ成形 露文	口】クロ成形	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	良	-	上田CII
S3	A13	-	灰色土	青磁	瓶	-	-	(2.6)	口】クロ成形 露文	口】クロ成形 露文	1mmの 白色砂粒2%	良	(口)0.7/12	上田CII
S4	A10	-	褐色土	青磁	皿	-	-	(2.6)	口】クロ成形	口】クロ成形	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	良	-	上田DII
S5	A10	-	褐色土	青磁	皿	-	-	(2.2)	角に斜面ハラズ 底】内壁磨き	体】クロ成形	1~2mmの 白色砂粒2%	良	-	
S6	A10	-	褐色土	青磁	皿	-	-	(2.4)	角に斜面ハラズ 底】内壁磨き	体】クロ成形	1mm以下の表面 茶色砂粒1%	良	底)1.9/12	
S7	A6-7	SE2	-	青磁	皿	-	(6.0)	(1.2)	体】クロ成形 底】内壁磨き	体】クロ成形	1mmの 白色砂粒1%	良	底)4/12	
S8	A10	-	褐色土	青磁	皿	-	(5.7)	(1.0)	高】内壁ハラズ 底】内壁磨き	体】クロ成形	1~2mmの 黑色砂粒1%	良	底)12/12	
S9	A10	-	褐色土	青磁	鉢	-	(6.0)	(2.7)	高】内壁ハラズ 底】内壁磨き	体】クロ成形	1mm以下の表面 茶色砂粒3%	良	底)3/12	
S10	A12	-	褐色土	青磁	鉢	(12.0)	-	(4.0)	口】底】クロ成形	口】底】クロ成形	1mm以下の表面 白色砂粒2%	良	口)0.2/12	上田BIV
S11	A7	SE3	-	青磁	瓶	(11.0)	-	(3.2)	(口-底】クロ成形 露文	口】底】クロ成形	1~2mmの 黑色砂粒1%	良	口)1.1/12	
S12	A14	SK18	-	青磁	瓶	(13.0)	-	(4.2)	口】底】クロ成形 露文	口】底】クロ成形	1mmの 白色砂粒2%	良	口)1.3/12	
S13	A10	-	黒色土	青磁	瓶	(13.4)	-	(3.8)	口】底】クロ成形 露文	口】底】クロ成形	1mm以下の表面 黑色砂粒1%	良	口)1.6/12	
S14	A6-T	-	灰褐色土	青磁	瓶	(14.0)	-	(3.2)	口】底】クロ成形 露文	口】底】クロ成形	1mmの 黑色砂粒2%	良	口)1.6/12	上田DII
S15	B1	SP 15-17	-	青磁	青磁	(15.0)	-	(4.2)	口】底】クロ成形 露文	口】底】クロ成形	1mm以下の表面 茶色砂粒2%	良	口)2.7/12	上田DII
S16	A10	-	褐色土	青磁	瓶	-	(5.4)	(2.2)	高】内壁ハラズ 底】内壁磨き	体】クロ成形 露文	1mmの 白色砂粒1%	良	底)3.4/12	

件名 番号	地区	道標	層位	種類	品種	法量(cm)			成形・調整技法・装飾		地土	焼成	残存率	備考
						口径	底径	残存存	外側	内側				
67 A10 -	黒色土	青磁	直	-	(6.0)	(2.8)	高[回転ヘラカズリ] 高[内面磨擦]	体[クロコ成形 見]青花 文 雜器:本 口:側]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)1.6/12			
68 A10 SES	-	青磁	直	(12.0)	-	(2.8)	口・内[クロコ成形 高[回転ヘラカズリ]	口:側[クロコ成形 底:文]	1mm以下の黑色 砂粒1%未満	良	口)2.4/12 底)1.2/12	繩締目		
69 A13 SK16	-	白磁	直	(9.0)	-	(2.1)	口・内[クロコ成形 高[回転ヘラカズリ]	口:側[クロコ成形 底:文]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	-	森田D		
70 A12 -	灰土	白磁	直	(10.2)	(3.9)	2.2	口・内[クロコ成形 高[回転ヘラカズリ] 底:黒]	口:側[クロコ成形 底:黒]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	口)1.3/12 底)2.8/12	森田D		
71 A10 -	褐灰色 土	白磁	直	-	(3.3)	(1.4)	高[回転ヘラカズリ] 高[内面磨擦 薄唇丸 「井」?]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の茶色 砂粒2%未満	良	底)3.2/12	森田D		
72 A13 SK16	-	白磁	八角杯	-	3.3	(2.9)	高[回転ヘラカズリ] 高[内面磨擦 工具痕]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)2.2/12	森田D		
73 A12 -	黑色土	白磁	小坪	-	(3.0)	(1.7)	高[回転ヘラカズリ]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の白色 砂粒2%未満	良	底)4.5/12			
74 A12 -	灰色土	窯戸・美濃	直	(11.3)	4.2	2.1	口・側[クロコ成形 底:窯戸・美濃[回転ヘラカズリ]	口:側[クロコ成形 底:窯戸・美濃]	1~2mmの 白色砂粒2%	良	口)1.6/12 底)7.2/12	大塚Ⅱ		
75 A12 -	黑色土	窯戸・美濃	直	-	-	(1.6)	口・側[クロコ成形 底:窯戸・美濃]	口:側[クロコ成形 底:窯戸・美濃]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	-	大塚Ⅱ		
76 A10 -	黑色土	窯戸	香炉	-	(5.0)	(1.6)	口・側[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	直輪形 回転ナダ 底:窯戸丸切目	1mmの 茶色砂粒3%	良	-			
77 A13 -	黑色土	窯戸	香炉	-	(5.4)	(2.8)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)3/12			
78 A6-7 SES2	-	窯戸	直	10.4	(5.0)	2.8	口・側[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	口:側[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	口)1/12 底)1.7/12			
79 A10 -	黑色土	窯戸	直	(9.0)	-	(2.0)	口・側[窯戸の虎形 底:窯戸]	口:側[クロコ成形 底:窯戸]	1mm以下の白色 砂粒1%程度	良	口)2/12	後N		
80 A7 -	蜂鳥 色土	窯戸	直皿	-	6.4	(1.5)	体・底[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mmの 灰色砂粒1%	やや 良	底)1.3/12			
81 A14 -	灰土	染付	瓶	-	(5.3)	(2.0)	体・底[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)2.2/12	繩締目 小坪C群		
82 A13-14 SX3	-	染付	直	-	(6.0)	(1.3)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)2.0/12			
83 A6 SK1	-	染付 (底部)	半腰瓶	(10.0)	-	(5.5)	口・側[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	口:側[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	口)1.4/12			
84 A6 SA2	-	中国?	鐵鉢	-	-	(1.8)	体・底[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	-			
85 A5 SK8	-	在地	鐵鉢	-	(7.3)	(6.7)	体・底[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)3.8/12			
86 A13 SK12	-	窯戸	天日高瓶	(13.0)	-	(3.4)	体[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mmの 白色砂粒2%	良	口)1.3/12	後N		
87 A5 SK8	-	唐津	瓶	-	3.6	(1.9)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)1.8/12	唐津Ⅱ		
88 A5 SK8	-	窯戸・美濃	天日高瓶	-	3.7	(1.5)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)1.2/12	大塚Ⅰ		
89 A7 SP35	-	窯戸・美濃	天日高瓶	-	4.2	(0.9)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[鉢形 口:側]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)1.2/12	大塚Ⅱ		
90 A12 -	立合	直	直皿	(14.2)	-	(2.0)	口・側[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	口:側[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mmの白色砂粒 1%未満	やや 良	口)1.1/12			
91 A7 -	立合	-	青磁	碗	(12.0)	-	(4.8)	口・側[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	口:側[クロコ成形 底:窯戸丸切目]	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	口)0.8/12	上田BRV	
92 A7 -	立合	包含層	青磁	碗	-	(6.0)	(2.6)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	見]青釉	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)4.1/12		
93 A12 -	立合	包含層	染付	直	-	6.9	(1.3)	高[窯戸の虎形 底:窯戸丸切目]	体[クロコ成形 見]青花 文	1mm以下の白色 砂粒1%未満	良	底)3.5/12		

第6表 木製品観察表

件名 番号	地区	道標	層位	器種	法量(現在値 cm)			種類	残存率	備考
					長さ	最大幅	最大厚			
90 A10 SK14	-	青磁	直	箸	7.1	5.1	0.4	-	1/2	
91 A7 SES3	-	下層	青磁	箸	9.1	0.5	0.4	-	1/3	90と同一個体
92 A14 SK18	-	青磁	直	箸	10.3	1.0	0.8	-	2/3	
93 A12 SES6	-	青磁	直	箸	11.7	0.8	0.6	-	2/3	
94 A7 SES3	-	下層	青磁	箸	13.8	0.5	0.4	-	4/5	
95 A7 SES3	-	下層	青磁	箸	14.9	0.6	0.5	ヒノキ科ヒノキ属	4/5	
96 A7 SES3	-	下層	青磁	箸	15.6	0.5	0.5	ヒノキ科ヒノキ属	2/3	91と同一個体
97 A7 SES3	-	下層	青磁	箸	16.6	0.6	0.6	ヒノキ科ヒノキ属	4/5	
98 A7 SES3	-	下層	青磁	箸	17.7	0.7	0.3	ヒノキ科ヒノキ属	完形	
99 A12 SES6	-	青磁	直	箸	19.8	0.6	0.7	ヒノキ科ヒノキ属	完形	
100 A12 SES6	-	ヘラか	直	箸	22.1	0.8	0.5	ヒノキ科ヒノキ属	完形	
101 A9 SES4	-	曲物底板	直	箸	21.1	3.9	1.1	完形	墨色のシ底(下地墨) 付着	
103 A10 SK14	-	枝	直	箸	63.2	10.2	8.5	-	-	

第7表 金属製品観察表

件名 番号	地区	遺構	層位	器種・用途	法量(現在値: cm)				残存率	備考
					長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
102	A11	—	墨褐色土	釘	5.25	1.0	0.35	3	完形	
129	—	立食・SP19	—	釘	5.2	1.34	0.53	4	極端欠損	

第8表 石器・石製品観察表

件名 番号	地区	遺構	層位	種類	材質	法量(現在値: cm)				残存率	備考
						長さ(cm)	最大幅 (径)(cm)	最大厚 (cm)	重量(g)		
104	A6-7	—	灰黑色土	砾石	重灰岩類 (堅い)	6.0	3.05	1.0	36	2/3	
105	A12	—	墨色土	砾石	輕灰岩類 (堅い)	4.7	3.9	0.7	14	1/2	
106	A12	—	墨色土	礫	新品片岩	5.8	4.0	1.0	23	1/3	
107	A10	—	褐灰色土	砾石	粘板岩	5.3	5.05	0.55	18	不明	
108	A11	SK4直上	—	板石	斧谷石	13.1	12.1	4.6	520	不明	
109	A15-16	—	—	五輪塔 水槽	安山岩	—	21.8	14.4	9630	完形	使用あり
130	—	立食・SK1	—	石臼	花崗岩	—	(38.0)	12.6	6250	1/3	工具痕あり

第9表 弓生時代以前の遺物観察表

件名 番号	地区	遺構	層位	器種 種類	部位	材質	法量(現在値: cm)				調整		胎土・色調	焼成	残存率	備考
							長さ (径) (cm)	最大幅 (径)-直徑 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	外面	内面				
110	A12	—	表土	打撲石斧 (分割形)	—	安山岩	14.7	11.1	4.7	666	—	—	—	—	3/4	
111	A6	SA2	裏込	磨製石斧 (大型船 刃石斧)	—	安山岩	15.1	6.1	4.7	716	—	—	—	—	完形	
112	A10	SA6	—	弓生土器 壺形	体部	—	—	—	3.6	—	全体 ハケ	全体 ハケ	1mm以下の 墨色砂粒1%	やや 不良	—	

第6章 自然科学分析

出土木製品の樹種同定

本遺跡から出土した木製品の一部について樹種同定を行った。

1. 試料

試料は福井県史跡白山平泉寺旧境内から出土した箸5点およびヘラ1点（No.95～100）である。

2. 觀察方法

剥刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡観察し同定した。なお遺物の形状からNo.100は木口の採取が出来なかつた。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種）の表（第10表）と顕微鏡写真（第19・20図）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis sp.*) (第19図No.95)

木口では仮道管を持ち早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが、顕微鏡下で識別は困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

2) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis sp.*) (第19図No.96～97、第20図No.98～100)

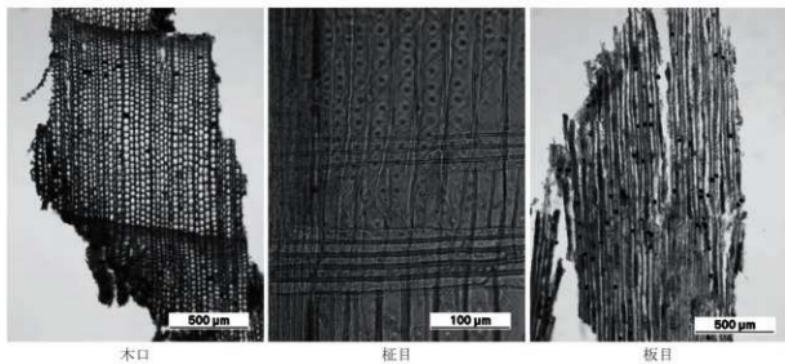
木口では仮道管を持ち早材から晩材への移行が急である。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織は全て単列である。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

使用顕微鏡

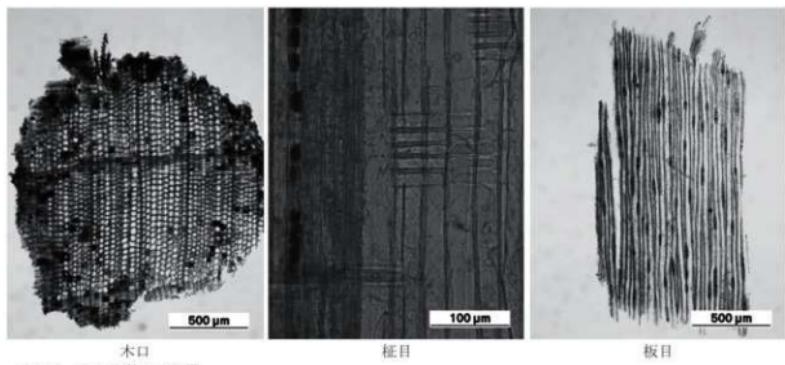
Nikon DS-Fi1

参考文献

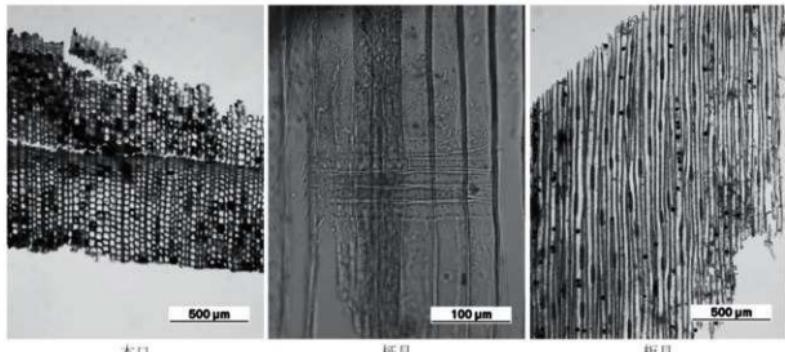
- 林 昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～V」 京都大学木質科学研究所
鳥地謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版
北村四郎・村田源 1979 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社
奈良国立文化財研究所 1985 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」
奈良国立文化財研究所 1993 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」



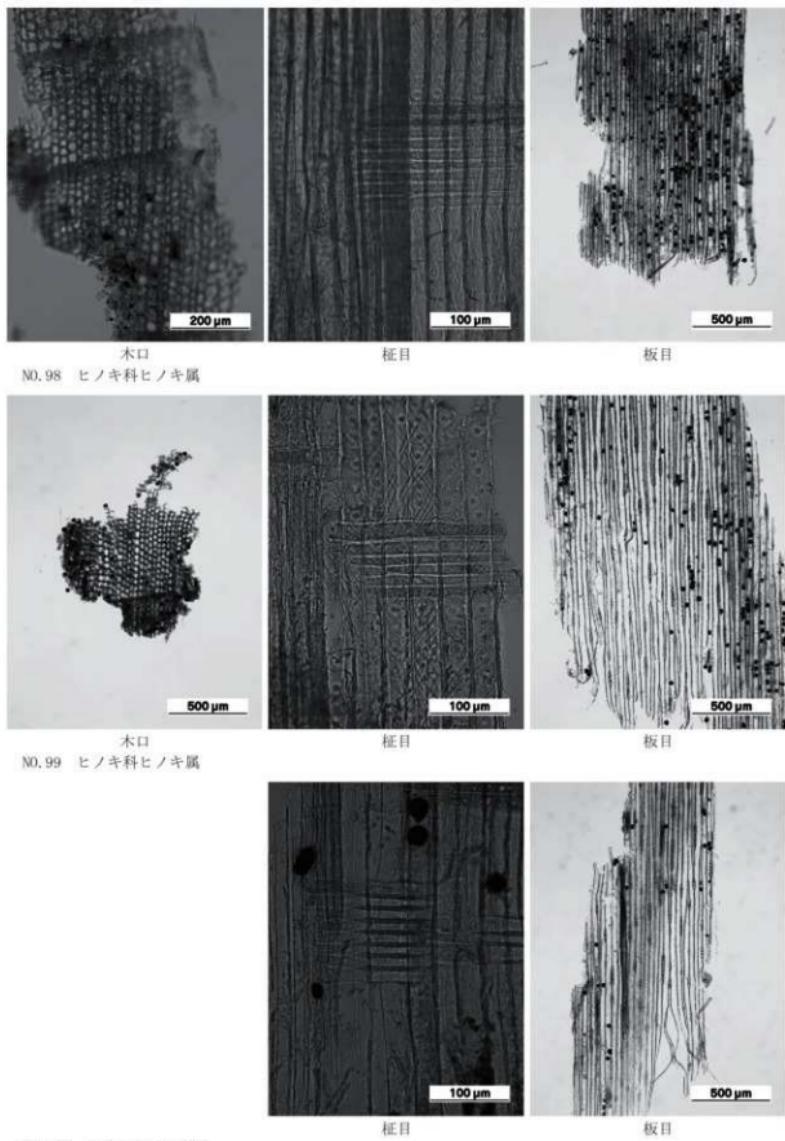
NO. 95 ヒノキ科アスナロ属



NO. 96 ヒノキ科ヒノキ属



NO. 97 ヒノキ科ヒノキ属
第20図 樹種同定顕微鏡写真（1）



NO.98 ヒノキ科ヒノキ属
NO.99 ヒノキ科ヒノキ属
NO.100 ヒノキ科ヒノキ属

第21図 樹種同定顕微鏡写真（2）

第10表 出土木製品同定表

NO.	遺 様	品 名	樹 種	木 取
95	SE3	箸	ヒノキ科アスナロ属	柾目
96	SE3	箸	ヒノキ科ヒノキ属	柾目
97	SE3	箸	ヒノキ科ヒノキ属	柾目
98	SE6	箸	ヒノキ科ヒノキ属	板目
99	SE6	箸	ヒノキ科ヒノキ属	板目
100	SE3	ヘラ	ヒノキ科ヒノキ属	板目

第7章　まとめ

今回の発掘調査では、近世～現代にかけての削平が顕著であったA5～B2グリッドを除き、中世平泉寺境内に関わる多くの遺構を確認することができた。本章では、中世の遺構を中心にまとめたい。

中世の遺構のほとんどは、掘立柱建物や櫛などの柱穴であり、居住城としての空間であったことは間違いない。1・2区中間に横切るSA6は、坊院を区画する土塁であることから、SA6を境にして1・2区内には南北二区画の坊院（以下、北区画・南区画）があったことが判明した。また、当時の平泉寺の様子が描かれた金山焼亡からおおよそ100年後の元禄期（1688～1704年）の作と伝わる『平泉寺境内地図』（平泉寺白山神社蔵）をみると、調査区東側に接する県道平泉寺・大渡線と調査区北端に接する南谷東西縦貫道路（以下、南谷東西道路）は、中世平泉寺境内の幹線道路を踏襲していると考えられるため、北・南区画の坊院の北・東辺はおおむね現幹線道路に相当するものと推測できる。ただし、調査区では北・東辺を区画する土塁などの遺構を確認することはできなかった。また、SX6は南区画の区画溝である可能性があり、その場合は、工事立会区で確認された遺構はさらに南に位置する別の坊院に伴う遺構と考えられる。

北区画の坊院はB1グリッドで井戸や柱穴群、A6・7グリッドでSA2構築前の段丘崖による区画や井戸2基、柱穴群、A9・10グリッドで井戸2基や柱穴群を確認した。A6・7グリッドの段丘崖から南谷東西道路までの長さは約25m、同じ段丘崖からSA6までの長さは約20mで、この段丘崖は坊院内もしくは坊院同士を区画すると推定する。

南区画の坊院では、A11グリッドで旧土塁と推定される集石遺構（SX4）、A12～16グリッドにかけて、井戸5基や掘立柱建物2棟、柱穴群などを確認している。掘立柱建物（SB1・2）の方位軸はSA6の方位軸とはほぼ一致し、他の柱穴群も同じような方位軸で柱列を構成する可能性がある。

工事立会区では、井戸1基や掘立柱建物1棟などの遺構を確認した。

遺構の時期については、1・2区では15・16世紀、工事立会区では13～16世紀に収まるが、遺構検出面は基本的に一面であったことや、遺構から出土した遺物が隠されていたこともあり、遺構群としての様相を時期ごとに明らかにすることはできなかった。各遺構の時期については第4章に譲るが、柱穴同士の切り合いが多いことや、15世紀代や16世紀代の遺構が各グリッドに混在する可能性が高いこと、また区画土塁の作り直し（SX4→SA6）や工事立会区における生活面の造成（SV1の構築前後）を考えると、13世紀代から、もしくは15世紀から16世紀にかけて坊院内での建物の建て替え、また坊院内や土塁・道路の造成が活発に行われていたことを推定できる。平泉寺の都市展開に伴う造成が、短期間のうちに成し遂げられたものではないことは、これまでにも指摘されているとおりで（吉岡2017、勝山市教育委員会2018）、今回の調査成果は、その指摘を裏付けるものである。

遺物については1・2区では15世紀後半～16世紀中葉の遺物が多く、一部15世紀前半の遺物も含む。工事立会区では13・14世紀の遺物も含んでいる。調査区全体では、16世紀後葉の遺物をほとんど確認できないことから、天正2年（1574）の越前一向一揆による平泉寺焼き討ちによる影響を反映していると考えられる。工事立会区SV1上の整地層（第10図調査区東壁略測図6層）に含まれていた多量の焼土は、この焼き討ちに由来する可能性が高い。

本調査区の坊院内には複数の掘立柱建物を検出することができた。建物の性格について、平泉寺では

通常、客間や仏間からなる主屋の柱には礎石で根元を支えることが多いため、本調査区で確認された掘立柱建物は、日常生活に密着した比較的簡易な建物と考えられる。本調査区では礎石の可能性がある川原石を数点確認しているものの、遺構のはほとんどが柱穴であり、基本的に掘立柱建物や櫛に関連すると考えられる。一乗谷朝倉氏遺跡では、柱穴埋土に伴う金属溶解片により掘立柱建物は職人工房と考えられているが、本調査区では工房をうかがわせるような遺物は出土しなかった。

また、調査区全体にわたって各柱穴群に井戸が近接している状況を確認できた。このことは、これらの建物が水を頻繁に利用する場、そして日常生活を送る場であることを示している。実際に、南谷坊院区画の区画2の発掘調査では、袖壁を境にして坊院内の北半に掘立柱建物と思われる柱穴や井戸が集中し、南半に礎石が多く見つかり、井戸は確認されていない（勝山市教育委員会2018）。このことから、区画2では北半を「ケ」としての場所、南半を「ハレ」としてみなすことも可能であり、本調査区の状況を「ケ」の場所とみることは不自然でない。平成9年度の下村屋敷南での勝山市教育委員会の発掘調査では（調査面積80m²）、礎石建物と考えられる数個の礎石を検出し、平成16年度の構口での勝山市教育委員会発掘調査では（調査面積100m²）、掘立柱建物と考えられる柱穴を多く検出している（福井県埋文センター1998・2005）。本調査区周辺の小規模な発掘調査で、礎石や柱穴が地点ごとにまとまって確認されている状況は、本調査区における柱穴の集中状況と対応しており、本調査区の西側には北区画および南区画とともに、「ハレ」空間が広がる可能性を指摘できる。

また、上記の中世の遺構・遺物のほか、本調査区では、弥生時代中期の土器や打製石斧・磨製石斧が出土している。これまでの発掘調査でも縄文時代の土器や石器、弥生時代中期の土器がすでに出土しており（勝山市教育委員会1995・2020）、少しずつではあるが、先史時代における本遺跡の状況も明らかになりつつある。

参考文献

- 勝山市教育委員会 1995 「白山平泉寺遺跡 県営広域営農団地農道整備事業大野・勝山地区（第4工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 勝山市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 勝山市教育委員会 2018 「史跡白山平泉寺旧境内 一国庫補助事業発掘調査報告書 遺構編一」
- 勝山市教育委員会 2020 「史跡白山平泉寺旧境内 一国庫補助事業発掘調査報告書 遺物編一」
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 「第13回 発掘調査報告会資料 一平成9年度に福井県で発掘調査された遺跡の報告一」
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 「第20回 福井県発掘調査報告会資料 一平成16年度に発掘調査された遺跡一」
- 吉岡泰英 2017 「一乗谷と平泉寺の建物・都市計画」「白山平泉寺 よみがえる宗教都市」 吉川弘文館

写 真 図 版



(1) 1・2区全景（東から）



(2) 1区全景（南から）



(3) 2区全景（南から）



(1) SA6 (東から)



(2) SA6 北側 (北東から)



(3) SX5 (南西から)



(4) SBI (南西から)



(5) 2区中央完掘状況 (西から)



(6) 2区南側完掘状況 (北西から)



(7) SP62 繪出土状況 (南から)



(1) SE1・SP15・16・17 (北から)



(2) SE2 土層断面 (北東から)



(3) SE3 完掘状況 (南から)



(4) SE4 土層断面 (北西から)



(5) SE5 碾磨跡状況 (北東から)



(6) SE8 (北西から)



(7) SE10 土層断面 (西から)



(8) SA2 南側 (南から)



(1) 立会調査区全景（南西から）



(2) SV1（西から）



(3) SP31 断面（南西から）

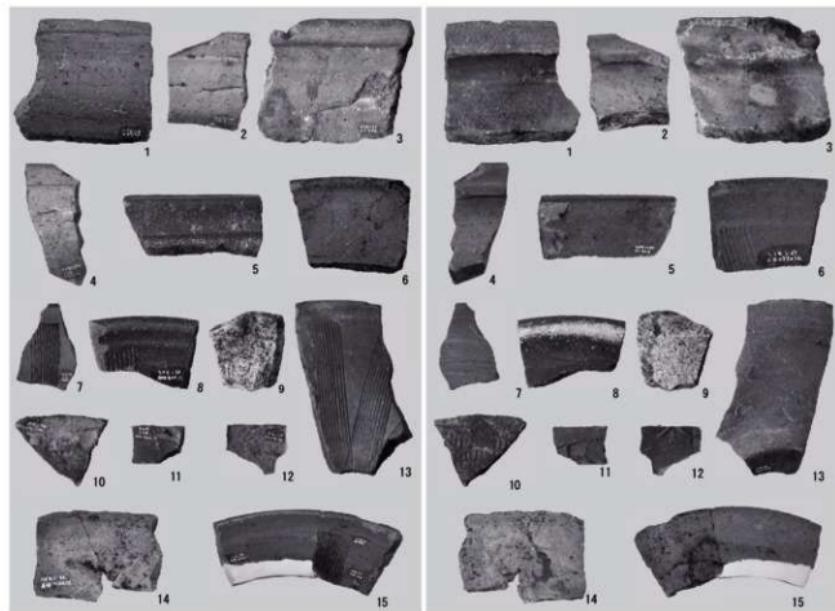


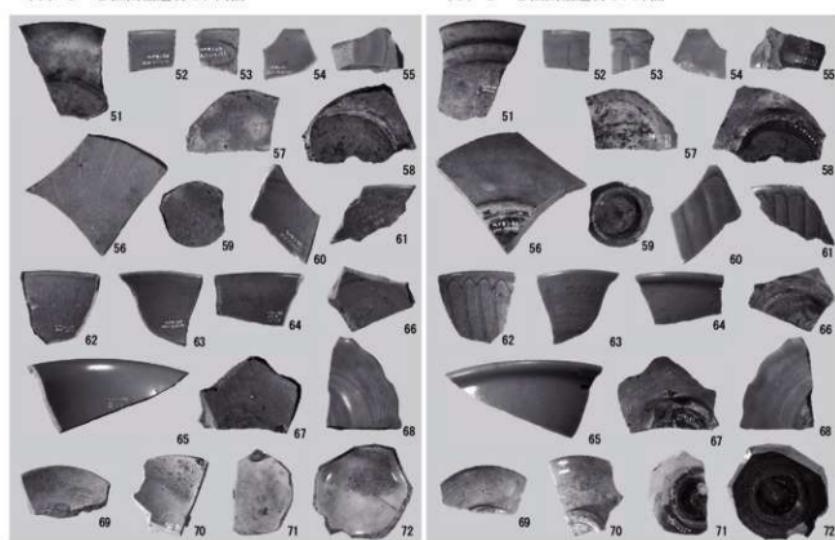
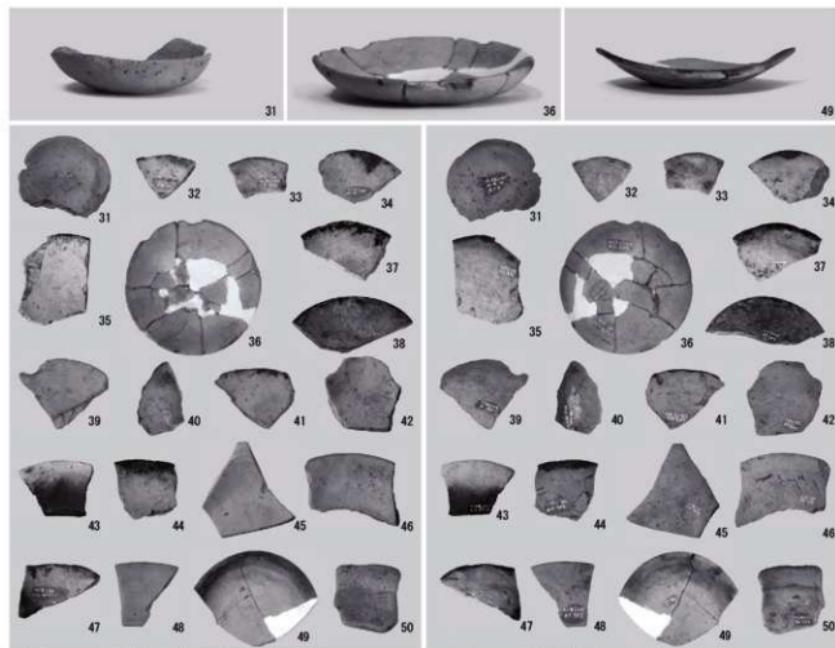
(4) SP9・10・26・27他（南東から）

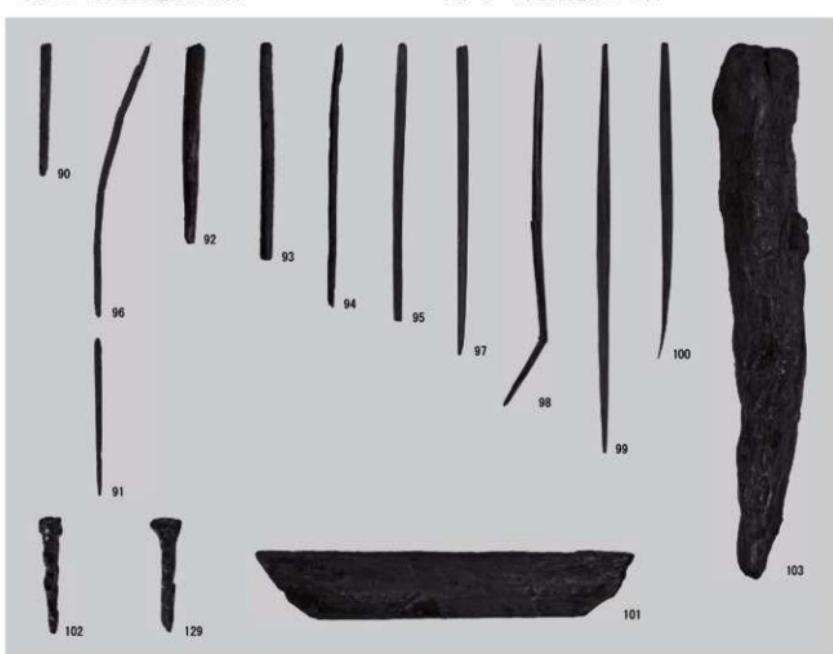
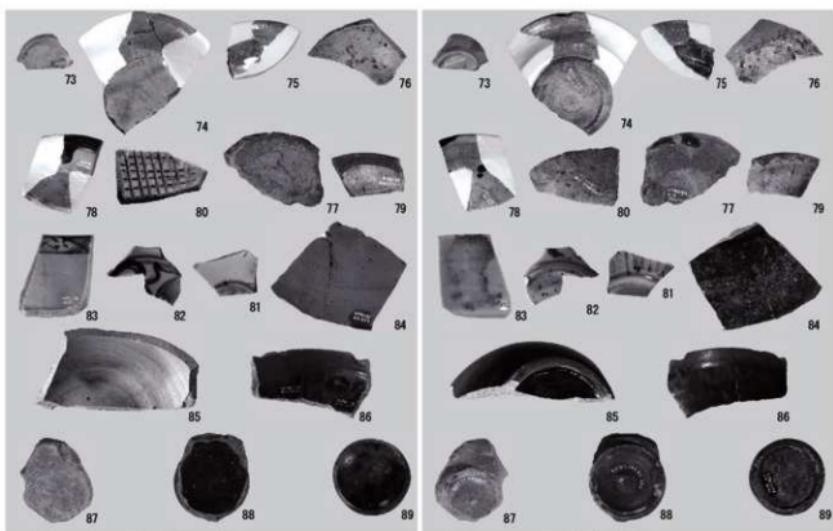


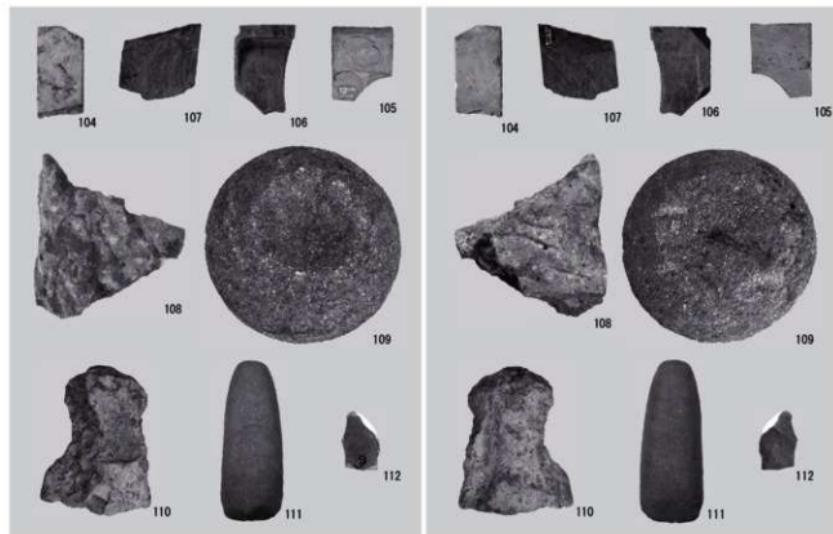
(5) SE1・SK1他（南東から）

図版第五
遺物



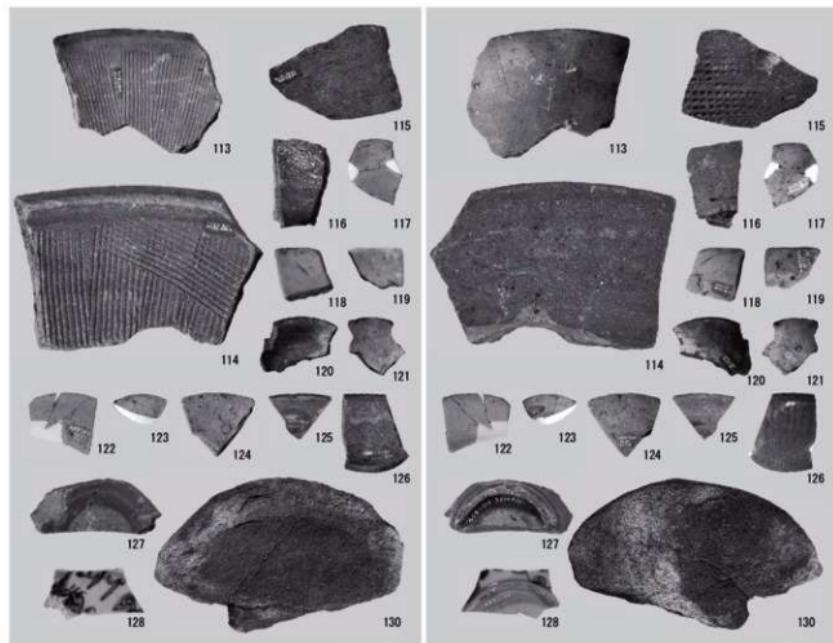






(1) 1・2区出土石器・石製品・弥生土器 表面

(1) 1・2区出土石器・石製品・弥生土器 裏面



(2) 立会調査出土遺物 内面

(2) 立会調査出土遺物 外面

報 告 書 抄 錄

福井県埋蔵文化財調査報告 第184集

史跡白山平泉寺旧境内

—一般県道平泉寺大渡線道路改良事業に伴う調査—

令和5年3月1日 印刷

令和5年3月10日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒918-8226 福井市大畑町97-21-3

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
